

シャイニーカラーズ短 編詰め

ウミガメ2号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

P i x i vで書いてた作品をこっちにも置こうと思いました。

P i x i vでの名前 ウミガメ

全作品、単品です。つながりは特になし。

アイドル視点の時もあり、P視点の時もあります。

目次

まだ、来てくれる人	1
時には雨も降るでしょう	9
ひまわりは見つめている	21
紅の現在地	36
色を付ける	54
お疲れ様とお休み	67
駄目じゃなくなるまで	80
凜世ともう一度アクアリウムへ行く話	91
微熱チアノーゼ	108
雨に傘、花に水、君に	129

まだ、来てくれる人

あの日、多分、はじめて。私は弱い自分を見せた。透たちと一緒にいるときは出さな
い、一番大切な友達にもみせることはなかった、臆病な私。

それなのに、あなたには見せることが出来てしまった。なんで？どうしてでしょうか
……プロデューサー……

レッスン室で一人、樋口円香は踊っていた。近々大きなオーディションがあり、円香
は時間を見つけては度々レッスン室を訪れていた。

今日の円香の動きは良くなかった。いつもより重く、鈍く、腕を振ることも、足を上
げることも辛そうで無理やりに動かしているようにも見えた。そして振りを間違えた
ところで大きく息を吐き、足を止めた。しばし呼吸を落ち着かせ、流れていた曲を止め
た。

不安に駆られてオーバーワーク気味になってしまふことは何度もあった。

比べられること、試されること。なにより競い合う相手が、負けたときに涙を流して
悔しがっているところをみたとき、真剣な彼女たちと一緒に立つこと。

それがなにより怖かった。

「…はあ、けほっ」

息はまだ荒く、少し咳き込んだ。WINGが終わってからというもの、本当に忙しくなった。他の子もそうだが、学業とアイドルとの両立は大変だった。学業はもちろん手は抜けず、アイドル活動だって熱が入ってしまっている。以前よりアイドルに向き合っている自覚がある。レッスンを借りる頻度も増した。もちろん自分のためであり、ユニットのためだ

プロデューサーのせいだ…

私が飛べるようにと願ってくれるから、私も飛ぼうと思ってしまう。おかげで、こんなにも大変です。あなた、私に何かしてくれるんですか？

「…もう一度」

今まではただ怖いだけだった。いや、今だって怖い。不安は消えない。けど、それでも、と。

だから円香は再びステップを刻みだした。しかし、やはりミスが目立った。今日のコンディションは良くない。忙しきで疲労が溜まっていた。自覚はあるが、どうしてもオーディション前だと気持ちが急いでしまう。

「…もう一度」

再びステップを刻もうとした時、扉が開く音がして顔を向けると、いつものんき顔がそこにはあった。

何故か安心した。見つけてもらえたように感じた。

「おはよう、今日も自主トレか」

「ええ、いつも通りなのでお構いなく」

「…最近、根を詰めすぎじゃないか、休んで体調を整えることも大事だぞ」

「ご忠告どうも、だけど平気です」

「平気か…」

「なんですか」

「…わかんないわけないだろ？」

プロデューサーは仕方がないなって顔をした。相変わらず顔に出る。そういうところ、嫌い。

少しずつわかってきたなんて言わないで。あなたにはわからないようにしてるのに。

「円香は平気な振りが得意だからな」

「事実、平気なので」

「いやいや、大人は悲しいことに結構平気な振りが得意なんだ。平気な振りなら円香よ

り経験あるんだ」

うんうんと頷きながら、少しカッコいいこと言ったな、って顔しないでくれますか。そんなこと、知っています。それに私をプロデュースするのなんて、平気な振り、沢山したでしょう。私がそうさせたのだから。

なのに、あなたは平気な振りして信じてくれた。

「驚きです、すぐに顔に出るあなたがそんな高等なことが出来るとは」

「はは、まあまあ、とにかくだ。オーディションも近い。その前に怪我や病気になったりしたら嫌だろう」

本気で心配してる顔。信じていないのではなくて、信じてるから心配してるあなたの顔。何度も見た。

そんな顔で毎回見られるこっちの身にもなってください。毎回応えないとなんて、すごく疲れるのに。

「そうですね、正論です。…でもあと少しだけですから…見てくれませんか」

「ああ、もちろん」

「じゃあ、お願いします」

「よし、音楽流そう」

そういつてプロデューサーが音楽を再生した。円香は先程と同じようにステップを

刻みはじめる。ステップは徐々に軽快になっていった。休憩がたらプロデューサー話をしたのが良かったのか。それともなにか別の原因でもあったのか。

繰り返しミスをしていた部分も乗り越えた。どうしても上手く出来なかったのに、と円香は思う。

(…ほんとに、最悪)

現金な身体め、心め、こんな都合良く動くなんておかしいじゃない。

この人が来て、見てくれているだけで、なんて。そんなの絶対おかしいじゃない。

そして、曲が終わった。一曲踊りきってしまった。荒くなった息を整えていると、プロデューサーが話しかけた。

「いや、すごかったよ。はは、ほんとに平気だったのか、俺の心配のしすぎだったか」

「だから言ったじゃないですか、嘘を言う理由がありませんので」

嘘。ホントに厄介。

「今日はこれで、帰ります。あなたの言うとおりこれ以上は今後のコンディションに関わりますので」

「ああ、そうだな」

「……」

「…え、えっと、なんだ？」

「いえ、今日は言ってこないんだと思っただけです。学習できたようになによりですが……」

プロデューサーは少し考えるような顔をして、言った。

「…今日はもう仕事終わるところだから一緒に帰るか」

「学習したことは捨てないことをおススメします」

「いいじゃないか、すぐに残りをまとめてくるから、待つてくれ」

返事を待たずに彼は行ってしまった。1人残された円香はため息をつき、片づけをはじめた。軽くモップがけをし。ジャージからいつもの制服にパーカー姿に着替えた。帰り支度をしながらプロデューサーを待つているとLINEの通知があることに気がついた。

「透……?」

開くと、かすかに微笑んだ透と慌てた様子のプロデューサーの自撮りのツーショットだった。

写真をみながら少し間をおいて、円香は大きく深呼吸をした。スマホを無言で操作する。

「すまない、お待たせ!…っつてどうした」

「いえ、これを見ていただけです」

「え、なんだ？…えーつとお」

プロデューサーは写真を見た途端、固まって変な声を出した。

円香は普段よりニコやかに言った。

「はい、なんでしよう」

「と、透がいきなり撮ってきてなあ？」

「はい」

「それで、消しとくようにつて言ったんだけど…」

「それで」

「いやだ、と」

「…」

「…」

「す、すまん。今度こそ、もうしないぞ」

「…はあ、いいですよ。別に…」

「え、いいのか」

「浅倉はそういうこと、誰にでもはやりませんから」

透がプロデューサーを信頼しているのは見ていればわかる。

どこか、普段より目がキラキラとしているように見えて、時々私もどきつとして、多

分気のせいじゃないんだと思う。

彼もそんなキラキラしている透に心をときめかせたりしているのだろうか。

「じゃあ、はい」

「え？」

カメラを起動して透と同じように撮った。ただのイタズラ。無表情でプロデューサーに近づいて、自分と彼を枠に入れてすぐにボタンを押した。

確認すれば急に撮られた間の抜けた彼の顔と少し赤くなった私の顔が写っていた。

「これで許します」

「…は、え？よくわからんぞ」

「別に意味もないイタズラです、ほら、帰りましょう」

「…まあ、うん」

少し戸惑った様子のプロデューサーを置いて足早にレッスンス室を出る。

赤くなった顔は、正面から見せられるほど素直になれない。

あなたが相変わらず私を振り回すうちに、もう少し素直になれるのかもしれない。
で。

私と言わなくても、まだ、あなたは来てくれるでしょうから。

時には雨も降るでしょう

「お疲れ様でした」

その言葉とともに樋口円香とプロデューサーはオーデイション会場を出た。外は既に薄暗く、雲が黒くなっていた。

私とプロデューサーは駐車場に向かい歩き始めた。

歩き出した円香は視線を落とし、口を堅く閉じていた。

冷たい風が吹いてきて、私は思わず身を縮めた。

重苦しい雲がかかった空を見て言った。

「降りそうですね」

「…そうだな、予報ではそんなことなかったと思うが」

円香もオーデイション当日の天気はチェックしたが、今日は一日晴れるという予報だった。

雲はどんどん黒くなっていき、今にも降りだしてしまいそうだった。

「寒いか」

「…いえ」

今日の天気は今の心情みたいだと、私はため息をつきながら思った。

オーディションが上手くこなせなかった。ミスしてしまった。何度も練習した箇所だった。できるようになるまで練習しオーディションに臨んだ。

緊張から、ミスをした。

もうオーディションは終了した。あとは結果を待つしか出来ることはない。頭では理解できていても、そのことが頭から離れなかった。

「(あんなに練習したのに…)」

「は、はっくしゅん!!」

落ち込んでいると、後ろで大きなくしゃみが聞こえ顔を向けた。

プロデューサーは寒そうに鼻水をたらした、円香から見ると間抜けな顔をしていた。

「…平気ですか」

「へ、平気だ」

円香はムスツとした顔をしてプロデューサーの顔を睨んだ後、顔を背けて頬を緩ませた。

「寒いので、早く行きましょう」

私は少し歩く速度を速めた。そんな私をみてプロデューサーも早足になった。

駐車場に着くと、私とプロデューサーは車に荷物を降ろした。私は後部座席に座って、息をついた。

車はエンジンがかかっており、暖房から暖かい風が少しずつ流れてきていた。

円香がチャットと前の座席をみると、車の中は少し散らかっていて、助手席に書類が置かれていたり、ドリンクホルダーには来る前にプロデューサーが買ったペットボトルのコーヒーの空が置かれていた。

「…資料混じるじゃん」

円香は身を乗り出し、助手席の書類をまとめ出した。

書類には自分が受けるオーディションについてまとめられており、練習メニューも書かれてあった。

自分が受けたと言ったレッスンも組み込まれた内容だった。

「……」

こんなに考えてるんだ。皆のこと。仕事だからっていうのはわかるけど、あの人も大人なんだと感じる。

「私のことも考えるんだ、あの人」

頭を振る。書類を見ながら仕事なんだから当然だ。そう考えていると、小走りにプロデューサーが運転席のドアを開けて、車に乗り込んだ。

「すまん、お待たせ」

プロデューサーの手にはいつも飲んでいるメーカーのコーヒーとペットボトルのレモンティーがあつた。

荷物を降ろすと、駐車場の自販機に買いに行つていたので。

書類を持った円香を見てプロデューサーが言った。

「ああ、書類。…すまん、散らかつてたよな」

「書類関係には気をつけたほうが良いと思います」

「ごもつともだ」

「…全員分の資料、あなたが？」

「まさか、社長もはづきさんもやってるよ。むしろ二人のほうが俺より早くて…」

「でしょうね」

「はは。ほら、レモンティー。微糖の、な」

「…どうも」

私はレモンティーを受け取り、一口飲んだ。あの時はレモンティーを頼んだけど、いつもこれってわけじゃない。最近飲み物の差し入れのときプロデューサーは決まって

レモンティーをくれた。まったく、たまには他の、カフェラレとかも飲むんですよ、と内心思った。

レモンティーを飲むと、甘くて、暖かくて、落ち着いた。

「…あつたかい」

「落ち着いた？」

「…はい」

「よかった」

プロデューサーは微笑んで自分のコーヒーを開けた。

飲むうとしたとき、ちょうど電話の音が鳴った。

「おっとと、待て待て」

「…持ちましようか」

すまん、とプロデューサーはコーヒーを円香に渡し、電話を取り出して通話をはじめた。

「もしもし。あつ、はづきさん。お疲れ様です。…ええ、先程終わりました、はい」

電話の相手ははづきだった。円香のオーデイションの事や、他の業務内容の確認を話している様子だった。

その間、私はプロデューサーの後ろでコーヒーを何となく見ていた。

また、これ飲んでる。

まだ話していて、聞いているともう少しかかりそうだと思った。

「……」

また少し待つとはづきとの話が終わり、プロデューサーがこちらを向いた。

「すまんすまん、また待たせてしまったな」

「…別に構いませんよ。必要なことだったんでしょうし。…これ、返します」

「ああ、ありがとう」

私からコーヒーを受け取り、プロデューサーも一口飲んで息をついた。

私もまたレモンティーに口をつけた。

「(……にが)」

口の中にほんの少し、ばれないくらいの量を含んで、広がった苦さを甘いレモンティーで流した。

プロデューサーがコーヒーの半分ほど飲んだところでキャップを閉めながら言った。

「じゃあ、そろそろ出ようか」

「はい」

車が走り出した。

しばらく走り、運転しながらプロデューサーが口を開いた。

「ああ、そうだ。覚えてると思うけど、今日は円香は直帰しても大丈夫だから、このまま送っていくよ」

「大丈夫です。さっきの電話。…この後仕事が残ってるんじゃないんですか」

「はは、まあそうなんだけども。…じゃあ、駅まで送っていくよ。事務所までの帰り道だし」

「そうですね、ではそれで」

またしばらく走っていると、フロントガラスにポツンと雨粒がついた。それは少しずつ勢いを増した。

「ああ、降ってきちゃったか。どうりで寒かったわけだ」

円香は窓越しにぼんやりと雨を眺めた。激しい雨ではなく、小雨でもなかった。

暖かくなった車内と身体。雨の音をゆっくりと聞いて、私はやっと落ち着いて、余裕が出来た。

渋滞というほどではなかったが、道は多少混んでいた。

車は赤信号で止まり、私は口を開いた。

「プロデューサー」

「なんだ」

「…今日のオーディションですけど」

ミスをしたのはプロデューサーにだって分かったはずだ。ミスしたときに何か記入している審査員がすぐ気になって、それを振り払うように後半動いていた気がするが、どうやって終わったのか、よく覚えていない。

今でもオーデイションは緊張する。何度やっても緊張する。それは当たり前のことだってプロデューサーは言う。失敗は誰にでもある。今までだってオーデイションに落ちた経験はあるし、私だけでなく皆経験していることだ。

けど、こうして失敗したときは、未だにどうしたらいいか分からなくなる。次に向かつてさっさと切り替えることができるタイプじゃないから。

信号が変わり、再び車が動く。

「……大丈夫だ」

「無責任な言葉ですね」

「ミスはあった。けどその他は言うことはない。…前さ、まだ結果はわからないのに悔しかったり泣いている子を見たって言ってたよな」

「……」

「…今、その子たちと似た顔してる。…悔しいって顔だ」

「運転してるから見えてないでしょ」

「ミラー…」

「…変態」

「…冗談。見なくてもわかる」

悪態をつけて顔を背けた。そして以前見たあの子達の顔を思い出した。情けないと、悔しいと、そういつていた、安っぽい笑顔の女の子。

笑える。よく言えたなって思う。それ以上になにもないのは私の方だったのに。合格通知を受け取るまで、私はどんな顔してたんだろう。

「悔しさを覚えるのは、円香が真剣になってる証拠だ。だから、大丈夫なんだ」

「…真剣」

「合格か不合格か、だけじゃない。たしかに結果は大事だ。特にこういう業界は」

「……」

プロデューサーはまたしばらく黙りながら車を走らせた。景色が見慣れたものに変わっていく。

もうすぐ駅に着く頃だった。

「円香、人生長いとき」

「は？」

私は突拍子もない言葉に呆気に取られた。

どこかで聞いたような言葉だった気がする。

プロデューサーは微笑んでいた。

「結果は大事。そうだよな。けどまだまだ円香は始まったばかりだ。これから先も、ずつと続いてく。失敗しても、俺が何度でも翼を用意するし、円香には一緒に飛んでる仲間もいる」

「また、恥ずかしい台詞。今夜は舞踏会ですか、王子様」

「はは、俺はポジション的に魔法使いだ。今馬車で運んでる真つ最中だぞ」

「…もう黙って、調子に乗りすぎです」

「わ、悪い、悪い」

にへらと、また笑いながらプロデューサーはおどけて見せた。

窓に強きたたきつけるように雨が強くなった。

本当に今日は荒れるな、なんて急に関係ないことを考えた。

今日は何回この人の言葉で顔を背けたか。疲れる…

本当に恥ずかしい人。そういうこと大真面目に言えるところ、ちよつとユーモアだったりするところ、嫌いだ。

「…あ、の」

「うん」

「今日、仕事どれくらい残ってますか」

「…ああ、それほど残ってないさ」

「……」

「……」

駅が近づいてくる。もうすぐ降りないといけなかった。

外を見ると、雨はさらに強くなっていた。傘をさす人や傘を持たずに駅に駆けていく人たちが道を窮屈そうに進むのが見えた。

円香は顔を外に向けたまま言った。

「…送ってください…：家まで。…今日、傘、持っていないです」

「ああ…この雨だと危ないからな」

車は駅を通り過ぎた。

雨が強いせいで、車はゆるやかな速度で走った。ゆっくりと流れる見慣れた景色を円香は息をつきながら見ていた。

暖房が効いて、車内はすっかり暖かくなっていた。

円香の顔は少し赤くなっていた。円香は既にぬるくレモンティーを取り出し口をつけた。

プロデューサーも運転しながらコーヒーを口に運び、思い出したように言った。

「そういえば、さ」

「なんですか」

「コーヒー、飲めるようになったか」

「ッ！」

「はは、あー、……ミラー」

「最低」

何回目になるか。円香は顔を背けた。

ひまわりは見つめている

ひまわりが咲いている。それは背が高く、元氣や勇氣等の言葉が似合いそうな花。綺麗なひまわり。

花言葉、あなただけを見つめる、愛慕、など。

あなただけを見つめる？カメラをですか。

愛慕？…想像もつかない。

真っ白なブラウスに薄い青のロングスカートの衣装。いかにも清楚って感じ。

ひまわりも、この綺麗な衣装も、私には似合わないなと、円香は思いながら微笑んだ。

シャッターを切るカメラマンの後方に立っているプロデューサーが視界に入る。微笑む円香にプロデューサーは息を呑んだ。そしてゆっくりと微笑んだ。

微笑んだプロデューサーを見て先ほどより頬を赤く染まった。

*
あなたの方がよっぽどひまわりみたいに笑うじゃない。

「いつまで落ち込んでいるつもりですか」

「えっ…なにがだ？」

プロデューサーは少し戸惑った様子で言った。

その日のプロデューサーは落ち込んでいるのがすぐに分かった。いつものオールドタイプ特有の元気と真面目が取り柄ですって顔と声に力がなかったからだ。円香以外のメンバーも気付いていた。事務所のみんなもすぐに気づいていたようだった。社長と葉月さんだけは事情を知っているようだったが、何も言わなかった。

夕方。仕事帰りの車の中だった。円香はプロデューサーと二人の時は積極的に話す方ではないし、沈黙のままだろうと気にしない。

しかし今日に限っては円香は聞かずにいられなくなり口を開いた。

「そんな顔していればわかります。私の仕事が終わった後でそんな顔されると、気になるんですが、問題ありましたか」

「ああ、違う違う！円香に問題なんてなかったよ！……すまん、確かにそう思っちゃうよな」

本当は朝から気づいていたけど、こう言えばプロデューサーも答えてくれるかなと思って、責めるように言ってしまった。

……別の言い方で聞けばよかった。内心想ったがもう言ってしまったものは仕方がない。

「…それで、何か」

「ああ……それは、次の仕事の方でトラブルがあった……というか」

あまり言いたくないようだった。しかし、聞かずにこんな顔をされ続けるのも落ち着かなかった。他のみんなも気にしていたし、仕方ない。

「私たちの仕事に関わることでしよう。ちゃんと伝えてください」

「……あー」

「言って」

声を低くして言った。プロデューサーはこつちが本気で問いかければちゃんと答えてくれることが多かった。

「……決まっていた仕事がなくなつた。円香たちの仕事だ。事情が変わつたみたいで、結局違う人を使うことになつたらしい」

「……そうですか」

ドラマみたいな話。本当にあるんだ、そういうこと。

円香がアイドルになつてからはそういう話一度も聞かなかつた。

「ああ、勘違いしてほしくないんだが、今回みたいなことは滅多には……」

「たまにあるんだ」

「……めんな」

プロデューサーは詰まつた言葉を無理やり出したような声音で言った。

「なんであなたが謝るんですか。あなたにどうにかできた問題なの？」

「それは…」

「ほら、なら気にしても仕方ないですよ。今からどうにかなる話でもないでしょう」

「……そうなんだけどなあ」

不貞腐れたような顔でプロデューサーが言った。打ち明ける前より楽そうな顔をしていて、ちよつとだけ安心した。

「いつもみたいなのに、だからその分、次の仕事は頑張ろうくらい、呑気に言えば良いじゃないですか」

あなたにはいつもどおりいて欲しいと思う。でない……そう、皆が迷惑するから。

「はは……けど皆もう頑張ってるからなあ。……ほんとに、よくやつてる」

あなただつて頑張ってるじゃない。

円香はため息をついてから言った。

「次の仕事の撮影場所って」

意識して暗い話は終わりにして、違う話題を振った。

近日、この近辺で雑誌の撮影が行われる。円香に振られた仕事である。

仕事終わりに次の仕事の話題が出来る程には自分も透たちも忙しくなってきた。

ノクチルだけではなく、283プロのすべてのユニットが忙しくなってきた。

さつきプロデューサーの言ったとおり、全員が頑張っている。

何かしら認められた証拠だろうと思う。事務所で一緒になったときに思うが、皆が楽しそうだとすることは感じられる。

多少のトラブルもあつたようだが、ユニットのメンバー同士で解決したようだった。少なからずプロデューサーも気にかけていたようで、円香はあまり心配はしていなかった。自分たちのことで精一杯だったというのも大いにあるが。みんなプロデューサーの言葉になにか、励まされているようだった。

あなたが暗い顔してるだけで、調子狂うくらいに、あなたは全員の心のどこかにいるらしい。

「この辺りでしたっけ」

円香は把握しているが、あえて聞いた。

「そうだよ、最近暑くなってきたし、気を付けないとな」

「そうですね」

「…すまん、気を使ってもらってる」

プロデューサーは申し訳なきような顔をして言った。

やめてほしい。今回は私が心配したのに、なんですぐに私に気を遣うの。

その顔は、嫌いだ。

「別に、いつまでも落ち込んでいられると皆に影響あるので」

「そう言ってくれると助かる。…よし、資料は後で渡す。以前仕事で行ったことがあるんだが、綺麗な場所だよ」気を取り直したように、プロデューサーは言った。

「ふうん」

あまり興味はないのが正直なところだった。アイドルになつてから、それほど経つてはいないが、様々な場所に行く機会は多くなつた。綺麗な場所と言うからには、綺麗なんだろう。だが綺麗だなと思って、それで終わりだろうと思つた。

「綺麗なひまわりが沢山咲いていてさ」

「ひまわり?」

言われてすぐに、自分には似合わないというか、イメージとは合わないような気がした。

「私が、そこで?それは本当に私がモデルの撮影ですか」

「そうだよ。似合うなつて思つて、交渉したら頂けたんだ」

「……似合わないと思います。うちからだつたら雛菜か小糸でしょう」

「確かに二人も似合うと思うよ。けどノクチルだつたら円香にやつてもらいたいと思つて。今までにない円香が撮ってもらえると思つてさ」

仕事を一つ取ってくるのはそれなりの労力があるだろう。それを自分にか。どこか

嬉しいという気持ちとプレッシャーが生まれた。

「昼間はもちろん綺麗なだけだし、夕方に夕日をバックにひまわりに囲まれる円香とかさ、すごく綺麗だと思うんだよ」

プロデューサーはさつきより早口で言った。

仕事のことで落ち込んでいたくせに、元気になるのも仕事のことなのか。

あと、いきなりそういうこと言うのもやめてほしい。似合わないって言ってるでしよ。

「…どうなっても知りませんよ」

「はは、大丈夫。結構自信あるんだ」

調子がちよつとずつ戻ってきたようだった。まさか、自分がこんな役割をするとは思aimしなかった。だが…

あなたが少しでも元気になるなら、話しかけてよかったのかもしれない。

——らしくない、と円香は息をついた。

*

夏をよく晴れたヒマワリ畑でのモデルの仕事。蝉が沢山鳴いていて、夕方からの撮影だが、まだ気温は下がらず、肌をジリジリと焦がすような暑さだった。

ひまわりはどれも背が高く、プロデューサーと同じくらいの背丈だった。先日、車の

中でプロデューサーが綺麗だと言っていたが、想像よりずっと綺麗だった。

間近で自分より背の高い花に囲まれるのは、中々すごいな、と円香は見たときに思っていた。

撮影が開始となつて、円香は衣装の白いブラウスと薄い青のロングスカートを着て、カメラマンの前に立っていた。何枚か撮つて、立ち位置や角度の確認をした。

焼けるような暑さに内心、ため息をついて、汗をぬぐつた。丹念に塗つた日焼け止めも汗で落ちてしまつているだろう。また塗り直さなければならなかった。

この白いブラウスなんて汗で透けやすいだろうに、ほんと嫌になる。替えにもう一着同じ物が用意されているらしいが、もう一着で足りるだろうか。

カメラのシャッター音が途切れて、カメラマンが言った。

「それじゃ、一旦休憩しましょうか。あともうちよいで夕日がいい具合に落ちそうなので、それまでね。樋口さんも皆も水分取つてねー」

「はい、わかりました」

プロデューサーが手には水とタオル。手首に日傘を引っかけて、近づいてきた。

「お疲れ、もうちよつとで終わると思うけど、無理せよにな。ほら、日陰に入つて」

「…どうも」

背の高いひまわりは日陰を作っていた。

水を受け取って、一口飲む。よく冷えていて、体の火照りが少しとれた気分だ。

「日傘、さしとくから汗拭くといい」

タオルも受けとって汗を拭きながら思った。

汗を拭いたこのタオル、この人に預けるのか。

——くだらないことを考えた。今までもこれから何度もあるだろうに。逐一考えていられない。集中が途切れた証拠か、休憩が終わったら気を引き締めなおそう。

「もう、行きます。それでは」

「もう？日陰で少しでもゆっくりしていった方がいいんじゃないか。焼けちゃうぞ」

「大丈夫です。日焼け止め、塗りなおすので」

「この仕事とってきた俺が言うのも変かもだけど、もう肌が少し赤い。休憩中は日陰にいるといい」

プロデューサーが少し赤くなった自分の肌を見ていると思うと、仕事だとはわかっていても顔が熱かった。こういった時のプロデューサーはしつこいほどに、こちらを心配、というか気に掛けるので、円香は大人しく従った。

「日傘、自分で持つか？」

「いえ、休むことにします。あなたが持っていてください」

そう言われたプロデューサーは、もちろん、と笑いながら言った。プロデューサーの

顔にも汗が滲んでいて、ワイシャツは汗で少し透けていた。

咄嗟に目をそらして、ひまわりに視点を固定した。なんで私が逸らすんだろう。流石アイドルの水着でも恥ずかしげもなく見てくるだけありますね。

今の衣装は汗で少し透けていて中々扇情的な格好をしているような気もするが、プロデューサーは何でもないように円香の隣にいた。

視線を逸らした先のひまわりを見ながら、気を逸らすように円香が言った。

「今日の撮影、なんで私だったんですか」

「え？嫌だったのか」

「嫌といえば嫌ですね。この暑い中の撮影は」

「はは、確かに、これは誰でも嫌かもな」

「いるでしょう、この暑い中でも元気に笑って撮影できそうな子達なら」

「まあな、けど俺も考えないわけじゃないさ。みんなが挑戦してみたい仕事や、似合ってるなって仕事を取ってくるのが俺の仕事だ。この前言ったように今回は円香に似合うと思ったからそうしたんだ」

「あなたは似合っていると言いますけど…」

「似合ってるよ」

プロデューサーは円香の言葉を遮るように言った。

「……私は似合っていないと……思います。その、どうすればいいと思いますか」

「そうだなあ、このひまわり畑さ、デートとかでよく来る人達いるんだって。この畑に誰かと来た時のこと想像したりとか、どうかな」

「…現場監督みたいな言葉をどうも。それは指示ですか」

「はは、えーと、リクエストっていうかなんというか」

馬鹿じゃないの。まだプロデューサーの方を向けずに内心呟いた。

*

ああいう言葉をいきなり掛けてくるのはやめてほしい。似合ってませんから。

カメラを向けられてから、改めて花を見た。

ひまわり。

花言葉、あなたを幸せにします、情熱、憧れ、など。

情熱？柄じゃない。憧れ？何に対して。

「樋口さん、お願いしますね」カメラマンが言った。

あなたを幸せにします？

デート？私が一体誰と。

「ああ、もうちよつと目線を…あれ？……うーん」

カメラマンが少し困ったようにシャッターを切った。

ああ、やはりだめだ。上手くいかない、いつもの撮影より何か意識してしまう。自分ではなく他の誰かならもつと出来たのだろうか。

恨めしい感情と助けを求める感情に自然にプロデューサーに目がいった。

真っ直ぐこつちを見てた。

「大丈夫」遠くて聞こえなかったけど、微笑んでそう言ったのが聞こえた気がした。多分気のせいだ。

心配そうな顔でもしてるかと思つたのに、何でそんな顔してるの？あなたの方がよっぽど、ひまわり似合うんじゃない？代わりますか？

また逸らすようにひまわりを見た。大きな太陽みたい。あつつい。

あなたみたい。

「…お、いいね！それぞれ！キープして！」

「え？」

「そのまま……うん！いいぞー可愛い！」

カメラマンが休憩前より楽しそうに笑い、シャツターを切った。

——心外、ホント。

何かされたわけではないが何処か悔しかったから、あえてカメラマンの後方に立っているプロデューサーに微笑みかけた。

プロデューサーは少し驚いたような顔をした後に、やっぱり微笑んでこつちを見た。

——馬鹿じゃないの、私。

しかし、夕日が赤くなったもの全てごまかしてくれるだろう。

そう期待しながら、またカメラに意識を向けた。

*

「お疲れ様」

「…お疲れ様です」

撮影は無事に終了し、プロデューサーはいつもの私服に着替えて帰り支度を終わらせた円香を迎えた。

円香は撮影時のことを意識しないようにプロデューサーの前に立った。

「それ、どうしたんですか?」

プロデューサーは片手に小さなひまわりを4輪持っていた。

聞けば、今日の撮影終わりに畑の関係者にもらったとのことだった。

「撮影にうちを使ってくれてありがとうってさ。事務所にも飾れるような大きさのをもらったんだ。ノクチルの4人分な」

「…そう」

「今日のこと思い出せるな。すごく良い仕事だったよ。スタッフ全員褒めてた」
「別に、思い出さなくていいです。行きましょう」

あの撮影は、いつもの自分じゃなかった。きつと暑さにやられたに違いない。
身体に熱さがぶり返しそうだった。それに気づかれたくなくて、歩き出した。

プロデューサーも追いかけて円香の隣に並んで歩いた。しばらく歩いていると、不意に軽く肩がぶつかった。

「あつ、すまん」

ふらついたのか、こんな近く歩いてたっけ。

前より近いような。

円香は自分が近いのか、それともプロデューサーが近いのか、どっちかわからなかった。

「いえ、私が少しふらついただけです」

「暑かったし、疲れたよな。早く帰ろうか」

「…はい、そうですね」

スタッフに挨拶を終え、駐車場までの道を歩きながらプロデューサーは口を開いた。

「この前さ、元気つけようとしてくれて、ありがとうな」

「は？」

急に何だろう。見るとプロデューサーの顔は晴れやかな表情だった。

「なんか、今日の円香の撮影みてさ。やつぱ間違つてないって思つて。なんかやる気出たつていうか」

「……私は仕事をしたのですが、勝手に元気になるなら、それはそれでいいんじゃない」

円香は口を意識して固くした。だがほんの少し緩んだ。

「はは……次の仕事も、なくなつた仕事の分、頑張ろうな」大袈裟に笑いながらプロデューサーが言った。

——呑気な言葉。……よかつた。

「それはあなたが取つてくる仕事しだいです。今日みたいに似合わないものは持つてこないように」

「いやいや、似合ってるよ。もつと早く気づけばよかつた」

「ふふ……だから、似合つてませんよ」

円香はプロデューサーの持つ小さなひまわりのように笑つた。

紅の現在地

紅葉がひらひらと舞っていた。

綺麗な紅色や黄色が頭上から時折降ってくる道を円香とプロデューサーは歩いていった。

場所は某観光地、時期は10月の下旬。紅葉が見ごろになる時期だ。山々は美しい紅と黄に染まっていた。天気は晴天で歩いていて気持ちの良い道のりだった。いつもであれば山での仕事は億劫だった。山は虫が出るし、距離の問題で出発は早く、目的地に着くだけでも一苦勞。帰りも同じ理由で遅くなりがちになるからだ。

しかし、今日のように清々しいシチュエーションであれば気持ちも軽かった。来ている場所は観光地でもあるため仕事でなければもっと時間をかけて歩き、景色を楽しみたいと円香は思っていた。

観光地だけあって自分たちの他に散策している人も多くいた。家族で来ている人達もいて、子供が紅葉を拾って綺麗だと笑っている姿もあった。それを見ながらプロデューサーは穏やかな笑みを浮かべていたのを円香は横目で見ていた。

円香が歩いていると、また紅葉がひらひらと舞い落ちてきた。目の前に落ちてきたの

で思わず手を出していた。別に取れなくても構わないと思ったが、紅葉はゆっくりと円香の両の手のひらにふわりと乗った。綺麗だったので少し頬が緩んだように感じた。

「綺麗だな」

「…そうですね」

後ろからプロデューサーが言つて、ドキリとした。平静を装つて手に乗った紅葉を見た。こういう場合は、綺麗なのは紅葉や景色のことを言っているのだろうと考えるが、プロデューサーの場合は綺麗なのは円香のことだ、もしくは両方だ、等々を口に出して言う場合もあるので内心ハラハラとしていて体温が少し上昇する感覚があった。

流石、王子様。プロデューサーの内心は知らないが、こちらの心を乱す言動にムスツとしながら小声でつぶやいた。

深く聞けば予想した言葉が出てくるかもしれないと思ったので、何も言わずに再び歩き出すと、プロデューサーも同じく歩き出して言った。

「もう少しゆっくり歩いてもいいぞ」

…また、見透かす。

「いえ、プライベートならそうしますが、今はいいです」

「そう言わずにさ、道が混むと思って早く出発したけど予定よりずっと早く着いたし」
笑いながらプロデューサーは歩く速度を緩めた。円香もため息を一つついてゆつく

りと歩いた。歩く速さが同じくらいになったが、円香がほんの少しだけ前を歩いた。並んで歩くのは気恥ずかしかった。以前なら自分は歩く速度を緩めなかつただろう。

早く歩いて距離が離れても、あなたはまだ来てくれるから。そんな考えが頭をよぎつたので頭を軽く振って追い払った。

そして二人はほんの少しの寄り道をした。

近くに湖や川があつて、天気が良い今日のような日は、その水面に紅葉が映るそうだと逆さ富士ならぬ逆さ紅葉がこの観光地の売りの一つであつた。それを見てプロデューサーが円香も水面に絶対映えるに違いないのだと言つて、また円香はダメージを負つた。景色を眺めていたため、円香も水面を見ていた。水面の自分も赤みを帯びていて恥ずかしくなつた。思わずさつき手に取つたままだつた紅葉を自分の代わりに浮かべた。

私は紅葉じゃないっての…

思考を切り替えようと、仕事のことを考えた。今日も雑誌の撮影なのだが、その湖と小川ですることになつてゐる。以前にも小川で撮影したことが一度だけだがあつたなと円香は思ひだした。

あの時、転びそうになつて、あの人、私の腰…

大きめのため息をついて無理やり思考を切り替えた。不思議そうな顔をしたプロ

デューサーがどうしたと尋ねたがなんでもないと顔を背けた。

*

休憩ついでに仕事のことを軽く話そうと遊歩道の入り口近くにある喫茶店で温かい飲み物を注文しテラス席で飲んだ。

おかげで落ち着きも取り戻した。時間もよい頃合いになってきたので二人は集合場所へと向かった。

そして二人は階段を昇っていた。階段と言っても十段もないものだが神社にありそうな少し急な石の階段だった。二人の前には家族が歩いていった。小さい子供がいたので父親も母親もゆっくり昇っていたが、二人は追い越さなかった。

すると子供が落ちてくる紅葉を取ろうとしてフラフラと足を動かした、後ろで見ている円香は危ないと思った時には子供は体勢を崩していたが、父親が転ぶ寸前で腕を取って助けていた。

…よかった。

「よかったあ」

横を見るとプロデューサーも危ないと思ったのだろう、前のめりになって子供が倒れそうだった場所に支えようとした両手が伸びていて、変な体勢になっていた。

前にいた父親が「ありがとうございます、心配してもらって」と言った。母親も笑顔

で頭を軽く下げた。プロデューサーは恥ずかしそうに笑いながら首を振った。

父親はプロデューサーより少し年上のように見えた。父親は子供を抱き上げたが、自分で歩く、と子供特有の高めの声で言い、父親の腕の中でバタついた。

可愛らしいと素直に思った。間近で見ると幼いながらも整った顔立ちをした女の子だった。後ろから見てるとどちらかわからなかったのだ。

父親はバタバタと腕の中で動く少女に諦めたのか、下ろして言った。

「お先どうぞ、子供と一緒にだとしてもゆっくり歩いてしまうので」

「いやあ、お気になさらず。大人でもそう歩きたくなくなるような場所ですし」

ははっ、といつももの笑いをしながら言うプロデューサーを見て、私もあなたと一緒にだといつもゆっくりになりがちだ、と思ったが言うことはしなかった。

二、三、言葉を交わして円香とプロデューサーは家族の前に出て歩きだした。

家族と少し離れた位置になってから後ろをちらりと見ると階段を登り終えていたが、あの子はまたフラフラと落ち葉を追っていた。それを見て円香は口を開いた。

「あの子みたいですよ」

「えっ」

「あなたが。さっきの女の子みたいって言ったの。フラフラ歩いてしまうところ。一緒に歩くと、合わせて遅く歩かないといけないところ」

目が離せないのは子供みたいだからに違いない。

「はは、まいったな。ごめんごめん、のんびり歩きすぎだったか。けどそんなにフラフラしてるかな」

「はい」

「そ、そうか気を付けるよ」

そうだ、こういう会話をしていた方が楽だ。こんな会話が自分達らしいのだ。

「はい、期待しています。あなたは優秀なプロデューサーですから、すぐ改善するでしょうね」

「ご、ごめんって」

「ほら、やっぱり子供みたい」

「はは、というか話変わって悪いんだが」

「…なんですか」

「あの子って女の子？男の子じゃなくて？」

「性別の区別もつかないんですか」

「いやあ、子供の時だどどちかわからない時あるだろう？」

「ないです」

そうか、とちよつと落ち込んだ様子のプロデューサーを見る円香は考え事をしながら

眺めた。

一緒にいるときはあえてこういう会話をしていた方がダメーシは少ないのかもしれない。しかし、それだと自然と口数も増える。それで以前より心を許したと取られても困る。悩みどころだ。

考えことをしていた為、黙った円香を見て取り繕うようにプロデューサーが口を開いた。

「あー、それにしても本当に綺麗だよなあ。目を奪われるのもわかるっていうか……つて、あ……」

円香に気を遣いながら景色に目をやりながらしゃべっていた為か、プロデューサーは小さな段差に思いつきり躓いた。

「ち、ちよつと!!」

円香は思わず、思いつきり抱き着いて押しとどめた。両手で思いつきり腰を掴んだ。男性一人は重かったがプロデューサーも足に力を入れてなんとか踏みとどまったおかげで転ぶことはなかった。顔がプロデューサーの胸のあたりに来てしまった。

一気に身体の熱が上がった。

やばい、絶対真っ赤だ。

…ほら、だから言ったでしょ。子供みたいだって。言葉も、行動も、全部、全部。

本当に視界に入っても目が行くってどういうことなんだろう。

「円香！ごめん助かったよ！いやあ危なかった」ああ、危ない危ないと漫画のような台詞をプロデューサーは言った。

…呑気な声どうも。

おかげで身体の熱はまだ冷めないが、顔くらいなら上げられそうだった。

「子供みたいって言ったことの有言実行ですか。びつくりするくらいまんま子供でした。中々高度な気の遣い方をするものですね」

「ええ!? いや、今のはわざとじゃ…えっと、わざと怪我するようなことしないって！」プロデューサーの顔を見ないように、皮肉を言った。酷いことを言ってるかもしれないが、危なかったのは本場で、円香自身もそうしなければ平静を装えなかった。目立つことをしてしまったこともあり恥ずかしさもあった。後ろにいた先ほどの家族にも見られていたこともあって、さっさとこの場から動きたかった。

プロデューサーは自分に非があるときは素直にこちらの言うことを聞いてくれるので、円香は一言、仕事に行きましょう、と言って何事もなかったかのように歩き出した。追いかけるよう急いでプロデューサーが横に並んだ。

「円香、その…ありがとうな」

「…もういいです」

また棘のある言葉が出そうだったが、プロデューサーの顔も少し赤みを帯びて言う気をなくした。結構歩いたし、今転びそうになって慌てたから多少火照っているだけだろう。自分もそうだ。そう思うことにした。

またプロデューサーの少し前に出て歩いた。

*

太陽が落ちそうな時間に撮影が終わった。空の色は青からオレンジ色に変わっていた。予定通りの時間にスタートし、撮影は順調に進んだ。予定されていた時間より少し早めに終了してほっと息をついた。気を少し抜いた瞬間、空気の冷たさに、円香は身を震わせた。撮影用の衣装はこの季節には少し肌を出していた為、すっかり冷えてしまっていた。撮影終了と同時にプロデューサーはスタッフに頭を下げながら円香にベンチコートを持ってきた。

「お疲れ様、寒かったろ」

「…どうも」

「寒いだろうから早く着替えておいでって言いたいが、挨拶してからだな。もうちよつと衣装のままで頼む。ああ、上着はもちろん着て良い。」

撮影が終われば終わりではない。今日の撮影の感想。衣装の感想。掲載される雑誌について。今日のロケ地について。軽くでも聞かれたら話さなければならぬ。それ

が終わるころには本来予定していた終了時間に終わることができらう。面倒だと思つたが、必要なことだと理解している。

いつも今日みたいに順調ならいいのに。早めに終われば面倒な雑談をしても時間通りに帰ることができる。と思つたが昼間のことを思い出した。やはり御免だと、まだ仕事の中の顔のプロデューサーと一緒に関係者に挨拶をしながら円香は思つた。

関係者に挨拶を終え、帰り支度も整い二人は来た時と同じ道を引き返ししていた。スツツ達は後片付けでもう少し残るらしく二人は先に現場から離れた。スマホで時間を見ると17時を少し過ぎていた。やはり予定通りだ。

時間はまだ早い、日が暮れるのが大分早くなってきていた。辺りも薄暗くなりはじめていたため来た時より人がいなかった。離れたところには人が見えるが、二人の周りは誰もいなかった。

円香は何を考えるでもなく、景色を眺めながら足を動かしていた。

：疲れた。なんだかんだ疲れた。昼間だつてこの人のおかげで疲れたし。

二人で紅葉を見て湖を見て、カフェでお茶を飲んだりしたことを思い出した。

スーツ姿、成人男性。私服姿、女子高生。女子高生か傍目にはわからずとも若い、女性“よりまだ”女子”と呼ばれるのが似合う。そんな組み合わせ。

…制服の方が逆にまだ誤解がないだろうか。いや、なんの誤解だ。

事務所でプロデューサーと二人きりになったことがない人はいない。普通だ普通。他のアイドルの子たちもプロデューサーと二人きりでどこかに行ったりする。

…そういうえば、一番最近では風野さんと山歩きしたとか言っていたか。茶屋でお茶したとかも言っていたような気がする。

…まあ、私もしたし。それなら問題ないか。

「はあ、あるでしょ…」

「どうした？」

思ったより下の方で声がした。意識を戻すと来るとき通った階段だった。円香は階段を下る一歩手前だった。

危なかった。それほど高さのない階段とはいえ転びながら落ちたら十分、大怪我に繋がる。円香の意識を戻した声は既に階段を数段下っていた。

「疲れたよな。ボーっとしてるとみたいだったけど大丈夫か」階段を下りたプロデューサーが言った。

「いえ、お気になさらず」

円香も降りながら言った。確かに疲れてはいた。慣れない道を歩いたせいもあり、顔には出さなかったが足にきていた。

「はは、灯織もトレッキングしたとき筋肉痛になったって言ってたな」

…何故かイラつと来た。なんでさつき内心考えていたことをピンポイントなタイミングで言うのだ。こっちは何か問題がないか考えていたのに。

これも顔に出さないがなぜか心がムカツとした。

その時、階段を降りている円香の前に上から何かが降ってきた。足を踏み出そうとしていたところに急に視界に入ってきたものに驚いて顔を背けたがそれがいけなかった。前に出していた足が階段を踏み外した。

「あっ…」

…やば。

転びそうな円香の視界はゆっくりになった。先に階段を下りていたプロデューサーが両手を円香に向かって伸ばしているのが分かった。

円香も咄嗟に両手を前に出した。

「円香っ！」

円香の視界を遮るように舞い落ちた紅葉が地面についた。

抱きしめられた。違う、受け止められただけ…プロデューサーの腕は円香の背

までまわり、強く力が入っていた。

円香の身体はプロデューサーの胸にスッポリと入っていた。

足はプロデューサーの足にくっついた。

腕は折りたたまれプロデューサーの胸に置かれた。

頭もぴったりとプロデューサーの胸にくっついた。匂いも感じた。

……また……これ。

……さいあく。

身体、熱い。すぐにそう感じた。自分の身体がプロデューサーにピッタリくっついて
いるという事実にあつくなる全身をすぐに落ち着かせようとした。

…上手いかない。

本当にあなたといると、こんなことばかり。上手いかないことばかり。なんとか取
り繕って見せているというのに。たまにそれさえも見透かす。これだからあなたと二
人になるのは嫌なの。

一瞬で沢山のことを考える頭があるのに、一向に引きそうにない熱。嫌になる。

「……怖かったな。大丈夫だ」

プロデューサーは落ち着かせるように円香の頭を撫でた。背中もぼんぼんと一定の
リズムでたたいた。

優しく撫でられて少しずつ落ち着いていく思考とは逆に身体はどんどん熱くなった。

「……変態。昼間の仕返し？」いつもよりずっと小さくかすれた声が出た。

「……はは、じゃあ…そうだな、仕返し。……ゆつくり帰ろう。怪我したら大変だ」

「…はい…その、ありがとうございます」

プロデューサーが腕をほどいて二人は離れた。プロデューサーの胸に置かれた自分の手が汗で濡れていて服で拭いながら、円香は彼の顔を見なかった。

まだ顔が赤い自覚があったので、プロデューサーの少し前を歩いたが距離は昼間より近かった。

そのままの距離感で帰り道を歩いた。

そして昼間休憩したカフェが見えてきた頃には夕日がほとんど落ちていて暗くなっていた。遠くに少しだけオレンジ色が残っていたがあと数分で夜空になるだろう。

強くもなく弱くもない風が吹いて火照った身体には心地よかった。

風が吹いた方に目を向けるひと際立派な木に目がいった。木には鳥が留まっ
どうしてか目についた。

その木の枝先の紅葉が今にも落ちそうだった。木に留まっていた鳥が飛ぶと、また風が吹いて、風に乗るように翼を広げていた。

円香は風に吹かれて揺れる葉を見て思った。

…ああ、落ちそう。

こんな風が吹き続けたらいつか落ちるだろうなと思った。

…馬鹿みたい。

葉は落ちるものだ。それが普通。それに自分を重ねることはない。

少しすると葉はやはり落ちた。ゆらゆらと舞い落ちてくる。

紅と黄がゆっくり舞い散る様をみて、やはり綺麗だなと思った。自分と大違いだ。

「おっと、ははっ。…綺麗だなあ」

プロデューサーに葉がゆらゆら落ちてきて、彼は両の手のひらを広げた。

そして綺麗に紅く染まった葉をプロデューサーの手が受け止めた。

いつの間にか日は落ち辺りは暗くなったので、紅葉が夜でも楽しめるように付けられ

ているライトがついた。

一気に明るくなって、プロデューサーがはつきりと見えるようになった。手に乗った

紅葉を親指と人差し指で持って円香に笑いながら見せた。

「…綺麗ですね」その顔を見ながら円香が言った。

「そうだな」

両方です。言えない。さっきまでそこにいる紅は自分だったのに。

あなたの手の手の紅が羨ましい。

*

「はあ」

円香は車に乗る前に駐車場のすぐそばにあるトイレに行っていた。これから車で1時間以上かかるためだ。明るいうちにここに来たときは想像できないほどの疲労がたまつた。主に心が疲れた。すっかり寒くなりトイレの近くにあった自販機でホットのレモンティーを買い、少し考えてからホットコーヒーも買った。二つの飲み物を手にプロデューサーの待つ車へと戻つた。

戻るとプロデューサーは車の中ではなく律義にも外で円香を待っていた。エンジン掛けているのだから中で待つていればいいのにと思った。背を向けていた為、近づいてくる円香にはまだ気づいていないようだった。円香は気にせず近づいた。

「やっぱ綺麗だなあ。…うん、円香みたいだ」

さつき手に取つたままの紅葉を見ながらプロデューサーが言つて円香の足が止まつた。

「……はあ、“気持ち悪い”かなあ。もしくは“変態”か」

「……ではどっちもで」

「あ……えつと、はは」

あえて遠慮なく声をかけた。プロデューサーは気まずそうに、いたずらがバレたときの子供のような表情を浮かべた。

「早く帰りますよ。…あと、その葉っぱ捨ててください。子供みたいに持ち帰ろうとしないで」

「えー」

「……私はまだ降りる気ありませんので」

「えっ」

「……私はまだここにいます。不満ですか」

プロデューサーは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに柔らかい笑みをして言った。

「……とんでもない。…いてくれよ」

「……まあ、いいですけど」

お礼です、とホットコーヒーをプロデューサーに押し付けた。それ以上何かを言うことはなく車のドアを開けた。エンジンのかかった車内は暖房が効き暖かくなっていた。プロデューサーも何も言わずに葉をそつと手放して車に乗りハンドルを握った。

「じゃあ、帰るか」

「…安全運転で」

「ははっ、もちろん」

車が動き出した。大きくなく小さくもないエンジン音を何ともなし聞きながら、円香は息を吐いた。

いつだったか今日みたいな夜に言った気がする。
あなたがこの車を止めるまでね。

それがいつになるのかは、まだわからなかった。

色を付ける

浅倉透は事務所に向かい街を歩いてる時に思わず二度見した。普段とちよつと違うあの人を見たからだ。違うと言つても羽織つている上着が違うだけだった。しかし普段見慣れない服をきていると人は雰囲気が多少でも変わるもので、一瞬わからなかったのだ。

だがやつぱり違うのは服装だけだ、とすぐに思った。よく見るといつものあの人だった。歩き方とか、カバンの持ち方とか。だから、すぐに近づいて声をかけた。目的地は同じだし、一緒に歩きたかったのだ。

「おはよ」

「ん？ おお、透！ おはよう」

交わす言葉はいつもと同じで特別なものはないはずなのに、いつもと違う服を着ているプロデューサーを見るだけで新鮮な気分だった。

服装つて、なんかそういうのがあると思つた。

「今日さ、なんか違うね」

「え、なにか変か？」

「ううん、変じゃないよ。…違うでしょ、服」

「…ああ、コートか！」

プロデューサーはなるほどうなづいた。

彼の寒い時期のトレードマークというか、勝手にそう思ってるだけなのだが。彼が寒い時期にスーツの上に着ているのは白いロングコートだった。しかし今日は真つ黒なコートを着ていた。反対の色になっただけで、いつもより新鮮に感じていた。

言葉も仕草も。同じはずなのだが透は少しだけドキツとした。

黒だと大人の魅力つてやつなのかな、それがアップするつてやつかも——と内心で思った。

「いつものコートはちよつと汚れがついちやつてな、クリーニングに出してるんだ。これは今使ってるやつの前に着てたやつ。見たことなかったっけ？ 何度か着てたと思うけど」

「うん…私は初めて見たかも」

黒いコート姿のプロデューサーは初めて見た。黒い服着てるところは見たことある。スーツだつて黒いし。だがコートが黒いのはなんでか新鮮だった。

男性はイメージだが、黒い服を着ている人が多い。寒い時期だと特にそう感じる。今歩きながら自分たちの周りを見ても黒いコート姿の人は沢山いる。もつといえれば男性

女性問わず着ているので、彼が着ていても珍しいものでは決してない。新鮮さは感じないと思った。

しかしー

「…いいね、カッコいいじゃん」

「お、ありがとう。これも結構気に入ってるからな。そう言ってもらえて嬉しいよ」

白コートは着こなしが難しいと思う。男性で着ている人は自分の周りでは彼しかない。そんな着こなしが難しい服を着こなすから、色々似合うんだろうなと思っていたが、シンプルな黒もやつぱり良いなと思った。いつものやつももちろん好きだが、こういう定番みたいなやつもー

…ささるかも

「黒、いいね。好きだよ」

「はは、そうか。そういうえば透は黒い衣装あんまりなかったな。私服では何回か着てたけどさ。衣装も似合うと思うけど…いやなんでも似合うか」

「ふふ、どうだろ」

確かにあんまり衣装では着ないな。黒。

「なら今度選んでよ。私服でも衣装でも、さ。黒…大人っぽいね」

「し、私服もって、勘弁してくれよ。…けど衣装は確かに、黒か…いいな。って俺に決

定権はないけど」

私服も衣装も駄目なようで残念だったが、彼が見たいと思ってくれる衣装を着ることが出来るならそれで良いことにした。

今は無理でも大人っぽい服を着て大人の彼の隣を歩くことを想像すると楽しい気持ちになった。

*

事務所には透とプロデューサーが一番乗りだった。

事務所の鍵は基本的に彼か、事務員のはづきが開ける。今日は、はづきがお休みで彼が鍵の当番だと知っていた。だから、寒かったがいつもより早く家を出た。そうすれば、自分が先に着いたら彼を待てる。彼の方が先に着いたら、待つてくれる。どっちでも良いと思った。

結局一緒に行くということになり、個人的には一番好みの結果になった。

事務所に入ってすぐに彼は暖房のスイッチを入れた。しばらくすれば暖かくなるだろう。透はまだ寒かったので上着は着たままでいたが、彼はコートを脱いで自分のデスクの椅子に引っかけて言った。

「ふう、寒いなあ。俺はコーヒ―淹れるけど、透は飲むか？インスタントだけだ」

「うん、欲しい」

「よし、ちよつと待つててくれ」

彼はパタパタとキッチンに向かった。

寒かったらコート着たままでいいのにーと内心思い見送った。見送った後に目が行ったのは彼のコートだ。彼の物は基本的に目が行ってしまう。ついには透はソファから立ち上がり、彼のコートを手に取った。やはり普通のコートだ。なのに何故こんなにも気になってしまうのだろう。

自分の上着を脱いで彼のコートに袖を通すと脱いだばかりなので温かかった。まだ部屋は暖かくなっていないため、丁度良いと感じた。

女の透が着るとももちろん大きすぎて、袖から手は出ず、裾は膝の下まで来ていた。コートに身を包んだ透は笑みを浮かべた。

「……うん、結構……いいな」

コーヒーを淹れると言ってもインスタントだったので、彼はあまり時間をかけずにカップを自分の分と透の分を両手に持ち戻ってきた。

彼は自分のコートを着ている透を見て、少し驚いていた表情をしていた。

「…おいおい、なにしてるんだ」

「え？えーと、寒かったから」

「自分の上着脱いで俺のコートを着ることもないだろうに」

「あつたかそうつて思つて、自分のより」

実際、すごく熱い。ふふ、やばいねーまだ温まりきらない部屋だが、透は少し汗をかいた。

彼は恥ずかしそうに、困つたように言つた。

「俺が恥ずかしいんだつて。すぐあつたかくなるから、脱ぎ…返しなさい」

「ごめんごめん」

今のような恥ずかしがったり、ちよつと困つた表情は好きだが、実際困らせたいわけではない。ジレンマ。

けどこれくらいしないとさーこの事務所の中では一番早く出会つたのに、ここにきたのは一番遅いのだから。

言われた通りコートを脱いで、椅子ではなくハンガーにかけた。

*

それから彼は三、四日ほど黒いコートのままだつた。まだクリーニング屋に取りに行つていないようだつた。そのため事務所の皆も彼の普段と違う姿を見た。

皆にとつても黒いコート姿のプロデューサーは珍しいみたいで結構話題上がつていた。そのため、他にもブラウンのコートも持っているという情報も得ることが出来た。透はまだ白いコートしか見たことがなかつたので、今度着て来ると頼んでみようかと考

えていた。

彼はストレートに似合うと言われたり、一部からはからかわれたりしていた。からかっていた一部の頬は多少赤くなっていたようだった。

わかるー

そんな彼だが今はコートを脱いで動き回っていた。次の仕事の準備の最中である。必要な荷物を車に確認しながら積み込んでいた。手伝おうかと声をかけたが彼は自分の仕事だから、と断った。

ノクチルでは透はこのあと仕事で円香達はレッスンだった。開始時間まで余裕があり、待っていたのだ。時間ギリギリになるころには雛菜を引っ張って小糸も来るだろう。

準備が終わるまで透はソファに座りながらスマホを眺めている円香に声をかけた。

「樋口はどつちがいいとかある」

「…なにが」

「コートの色」

ああ、と円香は何を聞かれたか理解したようだった。皆が話題にしていた為、彼女の耳にも入ってきたのだ。

彼女は興味がなさそうに、スマホから顔を上げずに言った。

「別に、どつちでもいいんじゃない」

「じゃあ……どつちかといえば」

「…白」

「なんで？」

「見つけやすいでしょ。あんなに真っ白なコート着てたら目印になるから」

「ふーん」

そう言っている円香だったが彼がコートを脱ぐまで、たまにスマホから目を外し、黒コート姿の彼をチラチラと見ていたのは知っていた。

樋口もささるんだ、黒ー

いまだにじつと見る透に円香はため息をついて聞き返した。

「なに？じゃ、浅倉は？」

「うーん…」

「…」

「…どつちも、で良いや」

「なにそれ、その答えはズルくない」

「ホントだからさ」

「…まあ、別にいいけど」

円香はそれ以上は聞かなかつた。彼女にとつてはいつものことであつたからだ。その後は特に気にすることなくスマホを眺めながらプロデューサーの準備が終わるのを待っていた。

*

その次の日は仕事で透とプロデューサーの2人だった。

透は仕事が終われば直帰しても構わないと言われたがブラブラしたいという適当な理由でプロデューサーと一緒に事務所への帰り道を車で走っていた。途中でプロデューサーが寄り道してもいいかと言ってきた。何処かに連れてつてくれるのかと思つたが、帰り道にクリーニング屋さんを通るからクリーニングに出してたコートを取りに行きたいとのことだった。

残念。一緒にいられるのは嬉しいけどさ。一緒にご飯とか食べたいなー寄り道良いや、と言いなながら彼からのありがたうを貰つた。

「その後はさ、プロデューサーどうするの」

「うん？事務所に戻つたら少し資料整理するだけかな。透はこの後ぶらつきたいっていつてたる？クリーニング取つたら行きたいとこの近くまで送るよ」

「私、お腹すいた」

透はわがままを言つた。

「うん？」

バックミラー越しに彼と目があってじっと見ていると、彼は笑いながら言った。

「…はは。…うん、いいよ。俺も腹減った。…飯食いに行くか」

「やった、もう仕事終わってるから割り勘だよね」

「え、ああそう言えば前そんなこと…でも俺がまだ工作中だから俺がー」

「割り勘、ね」

車の中で少し前のめりになって彼に詰め寄りながら言うと、彼は困りながらも了承した。

「あー、わかったわかった。ホントは奢られたがるんだがなあ」

「一緒の方がさ…いいんだ、私は」

透はあまり感情を出す方ではないし、出したとしてもわかりづらい方である。プロデューサーである彼もまだまだ透のことではつかめてはいないところはあった。

しかし、彼が分かるくらいには今の透は喜んでいりし楽しんでいりするような雰囲気から感じられた。

「どうも、ありがとうございました！」

クリーニング屋の店員からの言葉に軽く頭を下げながら彼はコートを持って車に

戻ってきた。その手には当然白のコートがあった。

彼は運転席に座りながら助手席に目を向けたが今日の荷物で埋まっていたので、後部座席に座っていた透に言った。

「後ろにおいていいか？」

「うん、いいよ。持っててあげる」

「おう、ありがとう」

身体をよじって彼はコートを透に手渡した。綺麗になったばかりのコートをしわにならないように柔らかく持ち膝の上に乗せた。

クリーニングしたばかりのコートはビニールカバー越しでも真っ白であることが分かった。彼は汚れがついたと言っていたが、綺麗になったようだ。どこが汚れていたのか分からなかったからだ。

「真っ白って大変だよね」

「え？」

「色とかさ、簡単につくじゃん。私も着るときは気を付けるけどさ、大変だよねって」

「ああ、確かになあ。気を付けてても汚れるときは汚れちゃうもんだし、そうなたら目立つしな」

「ふふ、大変だね。手入れ」

透はクリーニング仕立ての服に付いているビニールカバーをずり上げてコートに直接触りながら言った。

指でコートの生地をさらさらと撫でた。爪には薄く青いマニキュアが塗られていた。

「白は……私の色、つきやすそうだなーって感じで………良いね」

皆の色も付くんだろうなと思っただが、綺麗になった真っ白なコートに、今回は私が最初、とほんの少しひっかいた。

お疲れ様とお休み

疲れているなど、浅倉透はプロデューサーを見て思った。

今日はオーデイションがあり透と彼は一緒に行動していた。一緒にいる彼の様子は、顔は笑顔なのだが目の下に隈が出来ていて、疲労が溜まり切っていると身体から滲み出ているようだった。

最近283プロのアイドル達は人気を獲得していつている。どんどん忙しくなり彼の負担は大きくなった。

透はその様子を見て心配をしていたが、今日は一段と疲れているように見えて気が気でなかった。オーデイション前に、彼はいつも言葉をくれる。その言葉はいつも透の力になっていた。

一人じゃないぞ、俺も一緒だー彼は笑顔で言った。

その言葉、好きだ。けど無理してる彼の笑顔は好きじゃない。

一人じゃないの、プロデューサーもだよね？ーいつものようにアガらない。気持ちが。けど落ちたら自分も悔しいし、彼も苦い気持ちになるに違いないと思った。

その日のオーディションは二位だった。合格したが、一位じゃなくて悔しかった。日誌に書くこうかと思っただけ、嫌だったからやめた。

「ごめん」

「なに言ってるんだ。よくやったさ」

オーディションが終わった後の彼との会話が好きだ。彼は褒めてくれた。嬉しいけど会話の時も声に張りが無い。いつもだっただらもつと会話を続けたいと思っただけ、今日はどちらともなく会話を切り上げた。残念だ。

*

透とプロデューサーが事務所に戻ってくる頃には、もう暗くなっていた。

彼は今、事務所のパソコンに向かってキーボードを打っている。いつもはパソコンに向かっているも伸びている背中丸まっていた。デスクの脇にはコーヒーターと栄養ドリンクとゼリー飲料が置かれていて、透にはやばい3点セットにしか見えなかった。

そんな状態で帰ってきた彼を事務所の皆は心配した。皆から見ても一目で分かるほどに彼の体調は良くなかったからだ。全員が仕事や帰宅で事務所を出る前に一声彼に掛けていった。どれも彼の身を案じた言葉だった。

人気が出てきたのも忙しい理由の一つであるが、それでも彼はよく働きの仕事を捌いていた。

もう一つ理由がある。それは年末に入ったからである。この時期は当然クリスマスと正月関連の仕事増える。それに加えてライブも行われることになっている。

つまりは事務所の全員に仕事がある状態だった。もちろん天井社長もはづきも、いつもより慌ただしく仕事をしているし、アイドル達も自分達で出来ることはやっている。

しかし、それでも一番動き回っているのはやはり彼だった。加えて、彼は時間の許す限りアイドルたちのサポートもしだすから更に負担が増している状態だった。

透はソファから立ち上がり彼に近づいて、ここ最近何度も言った言葉をかけた。

「…あのさ、大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ。…心配してくれてありがとうな」

彼は変わらず疲れた表情だったが、透には笑顔で言った。それ嫌だ。

最近何度も行ったやり取りである。透は今の彼が言う大丈夫が好きではなかった。心配してるって伝わっているなら、ちゃんと大丈夫になつてほしかったのだ。元氣になつてほしかったのだ。

どうやったら伝わるんだろうーと歯がゆくて、どこか苛立ちにも似た何かがある今の透

の中にはあった。

「……ねえ、これってさ。…伝わってるかな」

「なにがだ？」

「だから、心配してるよって…ことが」

「……ああ……すまん、伝わってる」

彼はすまなそうに言った。彼がいないと進めることが出来ない仕事があるということとは理解しているが納得はしていなかった。

「……と、透？」

透は彼の顔を両手で触れた。そつと触って彼の隈を親指で撫でた。

「……めっちゃ…隈できてるじゃん。目も赤いし」

「……あ、ああ。…その」

戸惑った様子の彼の顔を自分の方に向けて目を合わせた。

「ねえ、こつち見て。……私、心配してるよ」

さつきより伝わってるだろうか。

「……すまん」

「……今日は、お疲れ様にしょ？…私も、頑張るからさ。出来ることやるし、出来ないことは社長にもはつきさんにもちゃんと相談する。皆でやろうよ…」

「……ああ、そうだな。…駄目だな、気づいたら無理しちゃうんだ。悪い癖だな…」

残りは明日でも間に合うのに、と彼は目を閉じて大きく息をついた。それを見た透も息をついた。

頬を撫でながら、お疲れ様と呟いた。彼も疲労からか、されるがままにお疲れ様と返した。

それからお互い荷物をまとめて事務所を出た。遅くなると彼はよく送ってくれるが今日は断った。透と彼の自宅は近いというわけではない。それでも彼は遅い時間なのを理由にせめて、と最寄りのバス停まで送ってくれた。

バスはあまり待たずに来た。バスに乗り、家に着くまで彼も家に着いたかなとか彼の事ばかり考えた。

*

もう寝たかなー家について食事や風呂を済ませ、透は今日はもう寝るだけになった。明日は平日で学校だ。そろそろ寝なければいけないが、彼はちゃんと休んでいるか気になった。

連絡しようか、と思うが既に寝ていたらどうしよう。早く帰って休んでと言ったのは自分なのに、寝ていたら起こしてしまうかもと考えた。

チラリと時計を見ると23時を過ぎていた。どうしたら良いかとモヤモヤした。

いつそ寝てしまおうとベッドに入ったが、中々寝付けそうになかった。

横になりながらスマホをいじった。意味もなく彼との連絡のやり取りを眺めながら、電話のマークをタップした。

無意識だったため呼び出し音が鳴り、透は珍しく慌てた。

「おし……ちやった」

すぐ切ろうとしたが、切りたくなかった。数回コールがなつても出なかつたためやっぱり切ろうとしたが、それより前に彼の声が聞こえた。横になった身体を起こしてスマホを耳に当てた。

「もしもし、どうした？」

聞こえてきた声はハッキリしていて、寝ているところを起こしたようには聞こえない。おそらくまだ寝ていなかったのだと思った。

「寝て……なかつた？」

「ああ、けどそろそろ寝る所だよ」

「じゃあ、仕事してた？」

「いや、ゆっくり晩御飯食べたよ、のんびりしてたよ。……って信じられないかな」

「ううん、信じる」

「彼がそう言うなら疑わない。彼の“大丈夫”だって本当は疑いたくはない。」

休んで欲しいのに出てくれて嬉しいのもあつて、複雑な気持ちにもなつた。

「それで、どうかしたか？」

「ううん、なんか…電話しちやつてた」

「はは、そうか…心配かけちやつたな、ありがとう。…それで透は寝ないのか？明日学校だろう」

「うん、寝ようと思つてたんだけど、眠れなくて。…プロデューサーは大丈夫？」

「正直…キツイ。それにいざ寝ようとするとな手く寝付けなくてさ。凄く疲れてるのに……コーヒーと栄養ドリンクの飲み過ぎかな」

あ、言つてくれたーと思つた。彼も自宅に着いてようやく気が抜けたのか、いつも無理した大丈夫が出なかつた。いつもそうやって素直に出してくれたら嬉しいのに。

彼はアイドルたちのことはすごく気にするのに、自分のことは後回しにする。陰ですごく頑張つて皆のためにつて。そういうところ、かつこいいと思うけど、たまにすごく心配になる。

「飲み過ぎ…何本も、机の上にもゴミ箱にもあるし」

「面目ない、つい頼っちゃつて」

「ちゃんと寝られてない？」

「最近はな。けど今日はいつもより早く帰つてるし、あとは寝るだけだし。…寝付けな

いって言ったけど、横になってたらそのうち寝ちやうさ」

彼とのちゃんとした会話は久しぶりのような気がした。今日は朝から仕事とオーディションで一緒にいたが、いつもの会話は出来ていなかった。

今みたいな会話で、どんどん安心していく実感があつた。

やつぱ…一人じゃ駄目だなーと思つた。

「透は疲れてないか、透だつて忙しかったろ」

「うん、忙しかつた。最近プロデューサーと話し…出来ないなつて思つてた」

「…そうだな、ちゃんと会話するの久しぶりか。よし、もうちよつとだけ話すか？」

「いいの？疲れてるんじゃない？」

「疲れてる…けどまだ眠くないんだ。それに俺も話をしたいしき」

それから少しだが仕事の話だったり、仕事に関係ない会話をした。久しぶりで透はいつもより多めに喋つた。彼からも時折笑い声が聞こえて嬉しかった。

気付けば24時を少し過ぎていた頃に、彼からアクビが聞こえた。

彼はすまん、と言つた。残念だと思つたが彼には早く休んで欲しかった。なのに話せるのが楽しくて、嬉しくて、つい長く話してしまつたようだった。

「こつちも、ごめん…もう眠れそう？」

「そう、だな…よつこいしよ、やつと眠くなつてきた」

電話越しにギシツという音がして、その次にボスつと音がした。

「…今さ、もしかして横になつたり…した?…ベッド…とか?」

「いや、座つただけだよ」

彼のベッドか、と気になった。彼の自宅は知らない。どんな部屋なのか、何が置いてあるのか、どんなところで生活しているのか気になった。行つてみたいと思うが恐らく彼は駄目というだろう。何か都合の良いことが起きればいいのと思う。

…ベッド、か——

「……えーつと、透?どうかしたか…」

「プロデューサー、横になつてくれる?」

「え?」

「ほら、早く…ね?」

「ええ?わ、わかった。いいけど…なんでだ」

どうしたんだ、と小声で聞こえた。シーツの音が聞こえて彼が横になつたようだった。透も自分のベッドに横になった。

「私もさ、横になつてるんだ。ベッドで」

「え?ああ、そうか…」

「一緒に寝よーよ」

「……」

あ、今恥ずかしそうな顔してるー電話越しでもなんとなくわかった。どんな顔をしているのか想像だが、多分想像通りの顔をしてると思った。

けどさ、私も……結構恥ずかしいって思ってるんだよ——電話越しだから彼はわからないだろうけど。緊張感でさつきより目が覚めてしまっていることなんて、彼には分らないだろう。

「…ほんとに、そういうことはあまり言わないようにな」

「プロデューサーにしか言わない」

「…ぐっ…それでも駄目だぞ」

「ふふっ、ごめんごめん……じゃあさ、寝る前に一つだけ」

「な、なんだ」

ちよつと警戒してる彼の反応に申し訳なさもありつつ、少し嬉しい。自分の言葉に動揺してくれるのが嬉しかった。

「お休みって言おうからさ…お休みって、言っただけでいいよ」

「お、おおう？…まあ、それくらいなら頼まれなくても言うぞ」

「ふふ……そっか。…じゃあ、お休みプロデューサー」

「…おう、お休み。透」

通話を切ると、透は大きく息をついた。スマホを手放しベットに身体を預けた。緊張で少し目が覚めたが、彼との通話を切ると一気に眠気が来た。

プロデューサー、夢に出そうー疲れた、と思いつながら呟いた。

「…夢に…出るかな」

私とかさー思いながら目を閉じた。それからほんの少し経つと意識はゆっくり落ちていった。

その日、透は夢を見た。朝起きて、朝食を取る頃には内容は忘れてしまったが、プロデューサーが出た事だけは覚えていて良い夢だったと思った。

*

放課後に事務所に向かい、プロデューサーに会った。昨日より元気そうだった。隈もちよつと残っているが薄くなっており、背中は昨日より伸びていた。声も昨日より張りがあり、安心する声だった。

心配した皆から差し入れや、料理が出来る人からはお弁当を貰っていて、代わりに栄養ドリンクとゼリー飲料が没収されていた。コーヒーだけは勘弁してくれという彼が面白くて笑ってしまった。

没収したドリンクとゼリーは何故か天井社長とはづきが飲んでた。飲み終えた二人は彼のデスクから書類をいくらか取って仕事をはじめた。

天井とはづきが多めに手伝ってくれたおかげで余裕が出来た彼とレツスン前に話すことが出来た。

「昨日は、なんかありがとうな。あの後は…まあ、なんとか眠れたよ。一度寝たらぐっすりだった」

「うん、私も良い夢見れた」

「良い夢か、どんな？」

「プロデューサーが出た。だから、良い夢」

「…はは、そうか」

彼が照れながらも嬉しそうに言った。

「プロデューサーは、夢とか見る？昨日は疲れてたから見てないかもだけどさ」

「ああ、たまに見るよ。俺もさ、たまにだけど透が出る時もあるぞ」

ドキリとした。本当なら、すごく嬉しい。そしてそれが彼にとって良い夢であつてくれたらと思つた。

「へえ、どんな夢？」

「透がトップアイドルになる夢」

「…そつか、嬉しい。…うん…私さ。頑張るから」

「え、おお。そうだな、頑張るか！」

私のもプロデューサーのも…夢の先に行きたいしー自分が見た夢の内容は忘れてしまったが、きつとそうなりたいて思うんだ。

「ちゃんと見ててね」

「ああ、いつも見てるよ。……言ってるだろう？いつも」

「…え？」

「一人じゃないぞ、俺も一緒だ」

「……」

「…な？」

「……ふふ」

やばい、刺さる、それ

駄目じゃなくなるまで

温かいなど、プロデューサーの手に触れたときに、西城樹里は思った。

その日は寒い日だった。現場に向かい、並んで歩いている時に自分の手と彼の手があつた時だ。今日みたいに寒い日は外を歩いているとすぐに手や足が冷えてしまう。自分の手はずいぶん冷えていて、寒いなど思っているから歩いている時に当たった。寒い中、彼は手袋もしてないのにずいぶん温かいなど思ったのだ。

彼は手が当たったことにすまんと一言いったが、別に気にしていない。彼はそれからコートポケットに両手を入れて、樹里も寒くて同じように上着のポケットに手を入れた。それでも自分の手は寒いままでポケットの中で手を握ったり開いたりした。樹里は何気なくポケットに入ったままの彼の手を見て言った。

「…アンタの手、あつたかいな」

「え？ ああ、これ持ってたからな」

彼はポケットに入っていた手を出した。その手にはカイロが握られていた。シヤカシヤカと中身を振りながら樹里に見せた。それを見て納得したように頷いた。

「ああ、なるほどな。今、手が当たったときにさ、今日すげえ寒いのになんか温かいなっ

て思ったんだ」

「…そう思えば樹里の手…すごく冷たくなってたな。…よし」

彼は迷わず手に持っているカイロを樹里に差し出した。

催促したように聞こえてしまっただろうか、慌てて樹里は首を振った。

「いいって。プロデューサーの物なんだし、アタシに渡したら今度はアンタの手が冷えるだろう」

「いや、樹里が寒い方が俺にとっては問題だ。言われないと気づかないとか、駄目だな」
寒くないかの一言くらいかけられるだろうに、と彼は言った。

彼らしいなと思ったが、最近の寒さにその台詞をいつも言っていることに気づいていないのだろうか。

「アンタは普段から気を遣い過ぎなんだよ。別にそんなに寒くねえから、そのまま持つててくれよ」

「大丈夫だ、実はもう一個ある！」

彼はコートの内側のポケットから封の切られていない新しいカイロを取り出してみた。

「まだ持ってたのか」

「そうそう。樹里にあげても、もう一個あるから大丈夫だ。新品の開けるから温かくな

るまで、嫌かもだけど俺の使っていいぞ」

「…別にそんなこと気にしねえよ。…それなら、貰っていいか」

「もちろんだ」

彼からカイロを受け取って、両手で握った。もう既にカイロは熱を持っていて、握ると手はだんだん温かくなった。

「ありがとうな」

「気にしなくていいさ」

彼は樹里が寒くなくなった様子を見て、笑いながら新しく開けたカイロをまたシャカシャカと振りながら言った。普段は大人なのにこうした子供みたいな一面を見ると微笑ましいなと感じた。

ていうカーー相変わらず、気になっちまう。

今日は手と手が当たってしまったからなのだが、目線が彼の手をずっと追ってしまっていた。

というのも、ある時期から樹里は彼の手がどうにも気になるようになったからである。思い出すとオーデイションの時とは違う感覚で身体が熱くなるのでやめた。

「ああ、お陰で身体もあつたかくなってきたぜ。なんかやる気が出てきたよ」

熱を払うように先ほどよりも足取り軽く歩いた。今日の仕事はラジオの収録で特に身体を動かすわけではないが、動き回りたい気分だった。この気分のままに樹里は彼に言った。

「そうだ、アタシのスケジュールだけどき。2週間後にオーディションあるだろ」

「ああ」

「それなんだけど、今週と来週に自主トレしたくてさ。レッスン室って借りられるかなって」

「いいけど。確か…空けられるはずだ。…けど今週と来週どっちも？ここのところあんまり休みなかったし、どっちかは休んだ方が」

「確かにそうだけどき、撮影とかラジオが多かったからダンスのレッスンを最近出来なくてさ」

「…わかった、ただしほどほどにな。それが条件でいいか」

「わかったよ、約束する」

笑顔で樹里は彼に返事をした。その日のラジオ収録も上手くいって、このまま勢いよくオーディションも合格してやると、レッスンを楽しむに一日を終えた。

*

数日後の週末。

樹里は痛みに顔をしかめていた。ジャージをまくって赤くなっている右の足首を撫でた。ちよつと腫れていて痛みもあり、今日はここまでかと思つた。

大きくため息を吐き大の字に寝そべつた。オーデイションが近いからと自主レッスンをしていたが、まさか怪我をしてしまうとは、馬鹿をしてしまったと自分に悪態を吐いた。スポーツをしていた時はこれくらいは怪我は日常茶飯事だったから動けないわけではないがダンスへの影響を考えると気分が落ちこんだ。

それに：

約束、破つちまつたなー申し訳なさが胸を支配した。

程々に。それが条件だったはずで、自分もそれを受け入れた。なのについ熱くなつて一人で動きを突き詰めていた結果がこれだ。

彼が自分を見たときに、どんな顔をしてしまうか簡単に想像できて嫌になる。

少しの間寝そべっていたが、いつまでもこうしているわけにもいかない。仕方ないからさつさと着替えて切り上げようと起き上がった。さつさとしないとプロデューサーが来てしまうかもしれない。彼は今日、樹里が自主レッスンしていることを知っている。今は外に出ているがそろそろ戻ってくる頃だと思う。こんなところ見られたら心配をかけてしまうだろう。

怪我をしていない左足に力を込めて立ち上がろうとしたときにガチャリとレッスン室のドアが開いてドキリとした。

入ってきたのは想像通り、彼だった。笑いながら片手に何か、袋を下げて入ってきて笑顔で樹里に話しかけた。

「お疲れ、樹里。差し入れを…」

彼はちゃんと樹里の様子を見たようで、目が一気に変わり慌てて駆け寄った。

樹里も観念したように息を吐いた。

「おお、お疲れ…」

「樹里」

想像した通り彼の顔が心配で染まって胸が締め付けられた。

「…ああ、その…すこし捻うちまった」

「そうか…ちよつと見せてくれるか？」

「…ん」

立ち上がるのをやめて座ったまま彼に右足を差し出した。彼が慎重に樹里の足に触れた。普段は温かい彼の手は、外に出ていたからだろう、とても冷たくて、触れられた瞬間ビクツとした。だがその冷たさに慣れると腫れて熱くなっている部分が冷やされ

て気持ちよかった。

「…アンタの手、冷たいな」

「あつ！すまん、外から帰ってきたばかりで…」

「いや、いいよ。大したことないけど、腫れてるとこ熱くてさ。冷たくて気持ちいいし…：…なんか安心する」

「…そ、そうか。なら良かったよ」

「…もうちよつとこのまま手を当ててくれないか」

「え？ああ、けど」

「…いいから、頼むよ」

そう言われ彼は黙って少しの間、樹里の足に手を置いた。

…心配されるから見られたくねえって思ったけど。いざ見つかったらこれかー！落ち着く。

先ほどまではやはり不安だったし、落ち込んだいた。

だが彼に見つけてもらおうと、ざわざわしていた気持ちが少しずつ薄れて、代わりに安心が胸の中にあつた。

「…プロデューサー」

「うん、どうした。…痛むか」

「ちよつと、痛む。…そうじゃなくて…心配かけて悪い。それに約束破つちまつた」

「…そうだな、破つてほしくはなかつた」

「うん」

「けど誰だつて気を付けていても失敗するときはある。俺なんて気を付けていても、いつも勝手に無茶して皆に心配かけつぱなしだ。俺が皆をサポートしなきゃならないのにさ」

彼は優しく笑いながら落ち着いた声音で言った。彼自身も心配していたが、大きな怪我ではないようでホツとしたようだった。その顔を見て樹里もようやく顔を綻ばせた。

やべえ、なんか嬉しく思つちまう…いつの間にか申し訳なさより、嬉しさが勝つて、そんなことを思った。

もう少しこのまま触れていて欲しいと、そう思った。しかし落ち着いていくにつれ現状に今更ながら恥ずかしさも湧いてきた。

優しい顔で自分の素足を彼の手が触れていることに、冷やされて気持ちよかつた身体が熱くなりそうだった。

樹里は内心慌てて違う話題をした。

「も、もう手は大丈夫だ」

「そうか、この後はとりあえず湿布と固定かな。事務所に救急箱があるから取ってくる

よ

「だ、大丈夫。歩ける。一緒に行こうぜ」

「そうか、無理せずにな」

「大丈夫だって。それにさ、えーと……そ、その箱。差し入れて言ってる？」

強引にだが、話を換えようとした。

「ああ、そう差し入れ。ケーキなんだけど」

「じゃあ、事務所と一緒に食べようぜ。あんたのことだから自分の分も買ってんだろ」

「うっ……べ、別に良いじゃないか」

「悪いなんて言ってるねえだろ。一人で食ってるのも寂しいし」

話題がなんとか変わったことに安堵して立ち上がろうとすると、目の前に彼の手が差し伸べられた。

「ほら、つかまってる」

「……おお、サンキューな」

手を掴むと、彼は慎重に樹里を支えながら立ち上がらせた。掴んだとき彼の手はもう暖かくなっていった。自分の足に触れていたからだろうか。そのことも妙に恥ずかしくてドキドキした。そのせいでまた彼の手から目が離せなくなった。

*

あの時は二人してテンパってどんな状況だったかよく覚えていない。思い出すことも、意識してしないようにしている。

気を付けていてもやってしまう時はある。彼が先ほど言っていたことだが、それは不運が重なった結果の出来事だった。

「す、すまん！決して！わ、わざとでは！」

彼も普段からは考えられないほど取り乱していた。自分より混乱してる人を見ると、逆に冷静になるなんて言われるが自分は決して冷静にはなれなくて、彼と同じくらいか、それ以上に混乱したのだと思う。

「こ、今回だけは見逃してやる！……ほんと駄目なんだかな！」

*

頭を振って追い払った。立ち上がって、手を放そうとすると彼は樹里の手を握りなおした。

「大したことないとはいえ、痛むだろ？杖代わりになるよ」

「いいって、一人で歩け……」

痛めた右足を地面に着くとビリッと痛みが走って思わず声が出た。

「ほら、無理しない。この後も少し待っててくれれば車出すから」

「そこまでしなくても……わ、わかったから」

断ろうかと思ったが約束を破ってしまったのは自分だ。観念して今日は彼の言うとおりにしようと思った。

彼も頷いて、二人で歩き出した。

彼がこんなに近くにいるのは、あの恥ずかしい思い出以来かもしれないと思いながら、もう少しゆつくり歩きたいと思った。

ほんととは駄目なんだかなー

「…はあ、駄目じゃなくなっちゃまう」

「え、なにがだ」

「なんでもねえよ！」

いつもと変わらない様子の彼を見て思う。

次同じようなことがあって、駄目じゃないって言ったらアンタはどんな顔するんだろうな、と。

凜世ともう一度アクアリウムへ行く話

雨の日のカフェで杜野凜世は注文を済ませた。

仕事を終える頃に雨は降り出し、凜世とプロデューサーは休憩と雨宿りを兼ねてカフェに入った。

このカフェは始めて入ったが、落ち着いた店内で雰囲気が良いと感じた。以前彼が入った、レコードの置いてあるカフェに似た雰囲気があった。あそこの空気と似ていて、好みの空気だ。

席に着いて、彼と一緒に落ち着いたような息をついた。朝からの現場で気を張っている時間が長かったのだ。

雨が降って良かったかもしれない。おかげで彼とこうして休めるし、二人の時間を楽しむことが出来ている。今日一日頑張ったご褒美のような感覚だった。ゆったりとした空気の中、カップに口を付けようとした時にプロデューサーが何気なく口を開いた。

「凜世って、今度のオフ空いてたりするか？」

その言葉にカップに唇が触れる前に身体が固まった。危ないところだった。口に含

んでいたらむせていたかもしれない。

「……は、い。…今週の土曜が……あ、空いております」

「そうか。なら、良かったらなんだけど」

「……」

どうにも期待してしまつて、緊張しながら彼の言葉を待つ。

「…えつと、その。……アクアリウム、行かないか？」彼も少し緊張したような口調で言った。

そして、すぐに以前の記憶が蘇つた。あの時は、残念ながら彼とは急な仕事で入り口までしか行くことはできなかった。とてもすまなそうにしている彼の顔も今、簡単に思い出すことが出来た。しかし、それは仕方のないことと理解しているし、凜世は入り口までだろうが彼と待ち合わせをして歩くだけで胸が一杯だったのだ。

良い思い出だと、はつきり言うことが出来る。

「あー、都合悪いかな」

思い出していて、つい返事が出来ていない自分に凜世は気づいて焦りながら口を開いた。

「悪く、ありません。…空いていると良かったです」

「いや、けど空いていても俺と一緒だとき。せつかくの休日なのに…」

「…いいえ、プロデューサーさまがお誘いくださるなら、喜んで…」

「…そうか、よかった。いや、前は途中で帰っちゃっただろ？お詫びって言ったらなんだけど、どうしても気にしてしまっただけ」

お詫び。その言葉にほんの少しだけ寂しさを覚えてしまうのは面倒くさいだろうか。

前のアクアリウムの件で、彼はまた今度来ようと言った。しかし、それからWINGに向けて慌ただしい日々を送っていた為、結局行くことが出来なかった。

お詫びではなく、お誘いしてほしい。少女漫画の登場人物のように考える自分に少しおかしさを感じる。

「はい、ですがお気になさらないでください」

「でもな」

「プロデューサーさまが私たちの笑顔が好きと言ってくださいるように、凜世もプロデューサーさまの笑った顔の方が好きでございます。…です、もう気になさらないでください」

「……そ、うか」

彼が照れたように手で口元を抑えた。一つ咳ばらいをするとコーヒーを持ってカップに口を付けた。照れ隠しなのだろうか。珍しい彼の赤面に凜世の頬が緩んだ。とても暖かい表情になっていることに凜世は気づかなかったが、それを見た彼はまた慌て

て、しかし表に出ないようにコーヒーをもう一口飲んで口元を隠した。

いつもは彼の方がこちらの心を乱すような台詞を言うのに。今だって、急に休日空いているかなんて聞かれて、心臓が一気に早くなったのだ。

ふふ、いつもと逆ですー胸をポカポカと暖かい気持ちになりながら思った。

「そういえば、チケツトはいかがでしたしょう。事前に購入しておいた方がよろしいでしょうか？」

今日はまだ月曜日だ。土曜日まで長くて、待ち遠しいのが悩ましくも、どこか嬉しいような気分だった。今日を含めて良い週になるだろう。

土曜日までは楽しみにして待つことができる。日曜日にはアクアリウムの思い出を楽しむだろうと思った。

彼はどう思っているのだろうか、とチラリと見ると何とも言えない顔をしていた。

「どうか致しましたか？」

「いや、実は…」

と、彼はカバンをゴソゴソと漁ると手に取ったものを凜世の方へと差し出した。

「これは…」

「チケツト、もうあるんだ」

「どうして」

「…とりあえず誘おうって考えてたんだけど、考えてたらなんか買っちゃって」
彼は気まずそうな顔をしていた。

「凜世にオフの日は予定あるかもってのは買ってから気づいて。…まあ、その、空回った」

「…ふいふ」

なぜだろう、空回りの理由も自分だと考えると、妙に嬉しくて恥ずかしい。

彼と同じようにカップに口を付けて、緩みそうになる口元を隠した。

*

約束の日。土曜日の昼頃に以前と同じ待ち合わせ場所に凜世は立っていた。今回も凜世の方が先に着いていて、そのことにホッとした。時間も前回と同じ。服装も前回ここに来た時と同じ着物を着ている。なるべく同じにしたいと考えていたのだ。

気づいてくれるでしょうかと、考えるが彼なら気づいてくれるだろうなと確信に近いものがあつた。

そろそろプロデューサーも来るはずだと、彼のことを考える。あの時は彼も見慣れたスーツ姿ではなく、私服だった。綺麗なシャツを着ていたが、ネクタイを締めていない。そんな些細なことでも嬉しかった。

今日はどんな服装をしてくるのだろう。考えるだけでも楽しい。アイドルになって

から彼には色んな姿を凜世は見せてきた。凜世も彼の色んな姿が見たかった。

考えていると、こちらに近づいてくる見慣れた姿があり、頬が緩んだ。

…見慣れた？

見慣れた姿の彼は、早足で凜世の前まで来て言った。

「凜世……悪い、待たせたか」

「いえ……」

「……まで前回と同じ。だがやはり彼の姿は見慣れたものだった。

「プロデューサーさま……お召し物が」

「え、なにか変かな……いつも通りだけど」

「……………」

そう、いつも通りスーツだった。それが凜世は悲しかった。スーツ姿の彼が嫌いなわけではない。むしろ好きだ。

しかし今日はそれは嫌だったのだ。プライベートなのに。前回と同じように私服がよかった。

「凜世は、前に来た時の着物なんだな」

「はい」

「うん、やっぱり綺麗だ。…よく似合ってる」

やっぱり気づいてくれた。嬉しい。けど残念だ。

私服じゃない理由は何なのか、聞くのもどこか怖い。言っていた通り、お詫びだから？これも仕事の一環だから？そうだったら嫌だった。

「あ、凜世？」

「…参りましょう」

言葉少なに歩きだした。本当は以前のように周りをぶらついてからアクアリウムに入りたかったが。

彼は戸惑ったように凜世の後についてきた。

「……」

複雑な気分だったが、歩く速度を緩めると彼が隣に並んだ。やはり隣じゃないと嫌だった。

隣に並んだ彼は、まだ戸惑い気味で申し訳なさも募った。

「…なんか、怒らせちゃったか」

彼は戸惑っていたが、落ち着いた口調で言った。

「…いえ、そのような」

「流石に機嫌悪くなっちゃったことくらいわかるよ」

「…申し訳ありません」

「いや多分、俺が原因だろ？」

「……凜世が、勝手に期待をしたのです」

「期待？」

勝手に期待をした。彼も今日の凜世と同じようにしてくれれば、想像していた。

勝手に期待をして、自分の想像通りでなくて勝手に落ち込む。最近、自分が面倒くさい女になっているような気がして嫌になった。

「私服だとさ……そう見える可能性もあるのかなって思ってた」

……え？——誘われた日の時と同じように、また彼の言葉で固まった。

困ったような表情で彼は続けた。

「俺と凜世って、なんか近いってはずきさんや社長に言われた事あってさ。ちなみに放クラの皆にもな」

「そう……見える」

「二人と放クラの皆に言われて、俺が勝手にそう思ったただけだぞ？ いや、面倒くさいとか嫌って思われるかもしれないけど」

「そう見えたら、プロデューサーさまは……」

「……」

赤面して、頬を掻いた彼を見て、なんだかこちらも恥ずかしくなってきた。

そんなに普段の自分は彼の近くにいたいだろうか。もっと近くにいききたい時もあるのに。

そんなに普段の彼は自分の近くにいたいだろうか。もっと近くに来て欲しい時もあるのに。

私服で来てくれなくて残念、という気持ちが一気に解消されていくのがわかった。

我ながら単純だ。いつの間にか、そう見える距離に自分達はいたのか。

「WINGが終わって凜世を知ってる人も増えて、人気だつて増してる。なのにプロデューサーの俺が迷惑かけるのは……」

それなら、そもそも誘うなよって話なんだけど。と彼は続けた。

それは駄目だ。嫌だ。

「プロデューサーさま、アクアリウムに入りませんか」

「……え、急にどうした？」

「いえ、ただ中を早く見たくなったのです」

「……そうだな、折角来たんだ。……入ろうか」

彼はまだ赤さの残る表情をしていた。そのまま少しなにか考える様にして息を一つ吐くと、締めていたネクタイを外した。

「…なんか、今日は天気良くて少し暑いよな。それに前はプライベートでネクタイもおかしいとか言ってた気が…」

なにも聞いてもないのに、彼は誤魔化すように言った。

「…ふふ…凜世もそう言っていた気がします」

ネクタイを外した姿。言ってしまったえばそれ以外はスーツのままだ。けどどちよつと嬉しくなった。

*

アクアリウムに入った後は、随分ゆつくり時間が流れた。

凜世が一人で入った時と魚の種類や水槽の位置も変わっていなかったもので、基本的に凜世がプロデューサーを案内した。

彼も広がる綺麗な光景に興奮気味だった。

全然違う…水槽の前で胸が暖かくなった。

先程の通り、以前来た時と変わっていない。違うのは一人ではなく、二人だということ。

それだけで、足取りが違う。薄暗い中で光る水槽を見て、こんなにキラキラしていたらだろうか、と。

こんなに違うのかと隣の彼を見て思う。

薄暗い場所をはぐれないように、近づいて歩いた。言われて思う。確かに近いかもしれない。時折手と手が当たるのがわかった。

「凄いな、幻想的ってやつだ」

「はい…美しいです」

撮影可能だった事もあり、好みの場所や水槽を逐一撮りながら歩く。

慣れないながらも、水槽を彼の事も含めて撮った。彼も凜世のことを撮った。

二人が映る写真は撮ろうか迷う。撮ったら…

そう見える可能性もあるかもってー

「…プロデューサーさま」

「お、どうした？ なにか…」

パシヤリと二人が収まるように思い切り背伸びて自撮りをした。

画面を見ると、凜世は映っているが彼の顔までは映らなかった。

「…むう」

「…驚いた、変な顔したかも」

「撮れませんでした…」

失敗した。不意打ちでなければ二人の写真など撮れないと思ったのに。

「…撮ろうか」

「よろしいのですか」

「そんな顔されちゃったらね」

ほっぺ膨らんでる。彼が微笑ましそうに言った。

「…反則でしょうか」

「はは。いや、凜世も良い方向に変わったなって」

明るく光っている水槽から少し離れた暗い場所だった。彼は手早く撮ると、二人しか写っておらず、しかも暗くてよくわからない。アクアリウムで撮った事もわからないだろうが、それでも良かった。そんな写真に二人で笑いあった。撮り直そうかと彼が言ったが、これで十分だった。

また、歩き出そうと凜世はスマホを一度しまった。

彼も撮りたい写真はあらかた撮り終えて、ポケットにしまおうとしたところでスマホが震えた。

「…」

彼は震えるスマホを一度見るとどうしようか迷った様な表情をした。しかし、そのままポケットではなく、バッグに入れた。

まだ電話のバイブの音が聞こえる。

「…プロデューサーさま」

「ああ、ごめん。びっくりさせちゃったな」

「…お仕事の電話では」

「いやいや、知らない番号だったから」

そうは見えなかった。出ようかどうか迷っていた。けど自分を優先した。少なくとも、そんな風に凜世には見えた。

嬉しきは当然あるが、彼のその行動にモヤモヤとした。もちろん自分を良く見ていて欲しいと思う。しかし、それで皆を見なくなる彼は…

「前はプロデューサーさまは出られました」

「ああ、それで嫌な思いをさせたらう」

「プロデューサーは普段のオフの時でも、電話に出られます。無理をしておりますか」

「いや、そんなことはないさ。必要なことだと思ってるし、何より皆のアイドル活動に関わることだからな」

「でしたら、どうぞ出てください。プロデューサーさま」

「え…」

「私を気遣ってくれたのは嬉しいです」

確かに彼の言う通り、前回は残念な思いをした。

あの時、電話を受けたあと戻ってくる彼の顔を見て、何となく察してしまつて寂しく

なったのも事実だ。

だが、そんな彼を好いている。多分、皆そうだと思う。

「ですが、アイドルとしての凜世に関わることならば、凜世でなくても放クラに関わることならば、そうでなくても他のユニットの方々に関わることならば…」

「凜世…」

「プロデューサーさまは283プロのプロデューサーですから」

そんな風に誰かのために駆けまわる姿が皆の目に留まるんだろうなと思う。

だから、皆さまもあなたが慕うのでしょうか。

彼が電話に出るため、二人で一度外に出た。

電話から戻ると、やはり取引先からだつたらしい。あちらの都合で夕方から打ち合わせたいそうだ。

内容はまだ規約で話せないが、放クラの仕事が決まったらしい。皆の顔を想像すると嬉しく思う。

まだ日も暮れていなかったので時間があつた。結果としてゆっくり見て回ることが出来た。

放クラの皆へのお土産も買って、帰る前にはジェラートを食べることにした。

以前食べた時よりバナナが甘く感じた。

*

日が暮れそうな時間になる頃に凜世はプロデューサーの車で寮の前まで送ってもらった。お土産で荷物が増えたのでありがた。

この後、彼は打ち合わせに行かなければならない。もし打ち合わせがなかったら夕食も一緒にとっていたのだろうか。想像するが、それだと本当に一日中一緒ということになる。仕事で朝から夜まで一緒に行動するときはもちろんあるが、休日ずつと一緒ということは今までなかった。

いつか休みもずつと一緒にいるような距離になることができたなら。

それは、まだ…なのでしょうー想像だけで恥ずかしくなってる自分。だから、まだなのだろうと思う。

あれこれ考えているうちに、寮の前に車が停まった。

シートベルトは外しながら、彼に向き直った。

「本日はありがとうございます。……とても、嬉しく、楽しい日でした」

「そうか、なら良かった。けどごめん。また途中で…」

遮るように言った。

今日は本当に夢見心地の時間だった。それを否定してほしくはない。

「いいえ、もうお詫びはいりません。…プロデューサーさま」

「うん？」

「凜世は、今どんな顔をしていますか」

「え」

「プロデューサーさまなら、わかるのではないのでしょうか」

「…：…そうか、そうだよな。それを信じないなんてプロデューサーとしてはなしだ。…よし！それじゃあ行ってくるか！」

彼は言われた通り凜世を見た。少し見ってから一度目を閉じると、納得したように微笑みながら言った。

「打ち合わせの前に一度事務所に寄るか。…それじゃあ凜世、忘れ物ないか？あつても後で届けるけど」

「いえ、お土産も持ちましたので…：…申し訳ありません、一つだけありました」

ただ、まだだとしても。いつかそうなれるように。

「おつ、気づいてよかった」

「はい、プロデューサーさま…：…ネクタイをお貸しいただけますか」

もつと近くにいけるように。

「…は？」

「たしかここに」

呆けた様子の彼のバックからスツとネクタイを取り出し、彼の首元に手を伸ばした。

「え？ちよ、ちよつと待つて…」

「…？これから打ち合わせなのですから、ネクタイを締めた方がよろしいかと」

「そうなんだけど、自分でやるから！」

慌てる彼だったが、無視してネクタイを巻いた。彼も凜世の手が首に回ると顔を赤くして固まった。身体が動かず、どうにも止めることが出来なかった。

「…はい、成りました」

彼と同じように赤くなった顔を隠さずに見せた。

「…なるほど。……反則だ」

息を呑んだような彼は、ようやく声がでるようになる、そんなことを言った。

微熱チアノーゼ

辺りが暗くなってきた。時計を横目で見ると18時をちよつと過ぎるくらい。事務所でマニキュアを持ち、目の前の人物に向き直る。とりあえず人差し指から塗り始めた。

手をこちらに差し出し、爪を塗られているのは、283プロ所属のアイドル、浅倉透である。

慎重に透の手を取り薄青い色のマニキュアを人差し指の爪に塗った。

何故こんなことになっているか。それは透との会話の流れで美容品の話題になった。透から美容品の話題が出るのは、すこし驚きである。失礼だろうか。

アイドル達の話題は美容系も多いため自然と覚える。自分は男性であまり縁はないが女性の多い職場であるため知識や流行など多少は頭に入っている。

そうしたら、いつの間にか透がカバンからマニキュアを取り出して、こちらに差し出してきた。当然クエスチョンが頭に浮かんだが、気づけば自分はマニキュアを持って透は手を差し出していた。

遊びのつもり。構ってほしい。理由としてはそんなところだろう。透はたまに想定

外というか、突拍子のないことをしたりする。

それをちゃんと把握できていないのが、プロデューサーとして悔しいところだ。

しかし、そういうった行動を透がとると妙に魅力的に見えてしまい、嫌いじゃないのが、大分やられている証拠だろう。

マニキュアを塗るために透の手に触れているからか、熱くなりいつのまにか汗が滲んできたような気がする。

こちらを見る透の表情はどこか満足気で口元が緩んでいた。いつも通り綺麗で可愛らしいと思った。顔が良い。

いつも透がしている薄青いマニキュア。頬の色が塗っている爪とは反対の色になりそうだ。

人差し指の爪をようやく塗り終えて、疲れたようにこぼした。

「…疲れたあ。難しいなこれは…」

「ふふ、そうでしょ。結構難しいんだ」

「透の爪はいつもちゃんとしてるな。自分で？」

「雛菜ちゃんが」

「なるほど、納得した」

アイドルから教えられる事や活動に関わることなら積極的に知ろうとするべきだと思う。

今はマニキュアの事も知ろうとしているが、当然スタイリストさんに代わって、等は考えていない。あくまでプロデューサーとしての仕事の範疇であると思っっているし、透についてもっと知りたいという思いもあるからだ。あくまでプロデューサーとしてである。

それを逆手に取られてイタズラされたりもするが、それも子供らしいところもあって可愛らしいと思う。

「なんかさ、意外かも」

「なにがだ？」

「勝手にだけど、プロデューサーってなんでもできそうなんて思ってた」

「はは、いいや。できることの方が少ないよ」

だから毎回頑張るのだが空回りの方が断然多い。もしなんでもできそうに見えてい
るのなら、そう振舞っているからだ。それだって見透かされるときの方が多
い。

外の扉が開く音が聞こえて、顔をそちらに向ける。

透の手を握ったままだったので、離そうとすると一瞬抵抗があったが、すぐに離れた。離れたすぐ後にドアがガチャツと音を立てた。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です」

そちらに目を向けると、間延びした口調で同じくアイドルの田中摩美々が入ってきた。透が先に彼女に向けて労いの言葉を言い、同様に労いの言葉をかけた。

「お疲れ、摩美々。今日は一人の現場だったけど、大丈夫だったか？」

「さあ、どうですかねえ……なにかあったかもです」

摩美々は手で自分のツインテールをモフモフといじりながら笑顔で返した。

その返しに安心した。

摩美々がこういう笑いを浮かべる時は問題無しだ。一日現場に出た疲労が少し見られたが、会話になると笑みがあった。

「なにもなかったようで何よりだ。最近は中々ついてやれなくて悪いな」

「…ですねえ、最近は一人でこなすことに慣れてきちゃいましたよお」

「いや、すまん。…明日の仕事は付いていけそうだから」

摩美々はいつもの悪戯っぽい表情で口角が上がった口元を手で隠す仕草をした。

透は摩美々にお疲れ様と掛けてからは、話に入ることもなく自分と摩美々の会話を聞

いているようだった。

二人は同じ事務所の一員として、最低限のコミュニケーションを取っているが特段親しいと感じる接し方はしていない。

まだ出会ってから日が浅いし、ユニットも別なので関わる機会も多くないから仕方ないのだが。

しかし今後の事を考えるならば良好な関係になっていて損することはないと、良いきっかけは何かないか考えた。

「二人は何してたんですか？」

「透にマニキュア塗ってたんだ。難しいなこれは」

「塗ってもらってた」

「…へえー、じゃあ代わりに摩美々がやりましょうか？結構得意なんですよー」

そう思っていると、都合の良いことに摩美々が提案した。

「おっ、そうか？摩美々はお洒落だからな。じゃあ…」

「ううん、プロデューサーにしてほしい」

「えっ？いや透、摩美々の方が上手に塗ってくれるぞ」

「うん、そう思うけど、プロデューサーが良い。…だめ？」

「俺はいいけど」

良いきっかけと思つたが、一瞬で終わつてしまった。こういう断り方をされると良い気分にはならないだろうと摩美々を見る。

「大丈夫ですよ。出しゃばりましたー。灯りがついてたのでちよつと寄つてみただけですから、摩美々はこれくらいで帰りますねー」

流石に笑顔は浮かんでいなかったが、それほど気分を害したようには見えなかったの
でホツとした。

こちらにお疲れ様、と言うと摩美々はスツと猫みたいにあツサリと事務所から出て
行つた。

再び透と二人になると、不意に透はプロデューサーの手を取つた。

「次、プロデューサーの番ね」

「え？」

これまた再びのクエスチョンだ。

呆ける彼を横目に透はマニキュアを取つた。

「今度は私が塗つたげる」

「いい、いやいや俺は遠慮するよ。男だしさ」

「いいじゃん、お揃いで。それに今日はプロデューサーも帰るだけでしょ」

「そ、それはそうだけど」

「手袋あるでしょ？まだ寒いもんね。：帰ったら落としていいからさ」

そこまで言われて大人しくマニキュアを付けることを受け入れた。

塗られている時と同じように満足そうな表情になった透は同じ色を彼の親指の爪から付けていった。

「あ、そういえば」

「なに？」

「さつきみたいな断り方はあまり良くないぞ、摩美々から歩み寄ってきてくれたのに」

「ああ、それは…ごめん。けど、私も久しぶりだったから」

「久しぶり？」

「プロデューサーが一緒なのが…」

「それは…」

そう言われたら弱い。事実だからだ。

「今度謝るよ」

「うん、ごめんな」

「ふふ、なんでプロデューサーが謝んの」

「たしかにな…っ、はは！くすぐったいって」

指先がこそばゆい。

それに思わず笑って、それを見た透も可笑しそうに笑った。

ひとしきり笑った後、気付けば彩られていないのは左手の小指だけとなっていた。

「はい、じゃあ仕上げね」

最後に小指の爪を塗り終えて、やっと手が解放された。見れば見事に左手の全部の爪が透と同じ色になっていた。

自分がした時よりも上手い。ムラがないというやつか。

「透も上手いじゃないか」

「気合いい、いれたから」

「はは、なんだそれ」

「ふふ、じゃあ乾くまで一緒に待とうよ。そしたら帰ろ」

「ああ、そうしようか」

「プロデューサー綺麗になったね」

「透がやったんだろ」

また二人で笑い合って、爪が乾くのを待った。

*

次の日は予定通り、摩美々の仕事に付いていた。

しかし、仕事は本当にアツサリ終わってしまった。

ラジオ収録だったが、摩美々は慣れたようにスタジオ入りし本番も特に問題なくこなしている。

パーソナリテイの会話にテンポ良く乗っている。パーソナリテイが上手いのももちろんあるが、摩美々もこんなにラジオが上手だったのだろうか。

付いてきたは良いものの、これでは自分がいなくても同じだったのではないか。ここに来てから関係者に挨拶しかしてないぞ、と一人でも問題なくなった摩美々の成長を喜びつつも、どこか寂しい気分だった。

他の皆もそうなのだろうか。プロデューサーは自分一人。こなせることにも限界があると皆は自分でできることは自分で責任をもつてやるようになった。置いていかれないようにしなくては。

「…まいった。もつと頑張りたくなっちゃうなあ」

「これ以上まだ頑張るんですかー?…本当に際限なく頑張ろうとするんですねー、プロデューサーは」

気づけば収録が終わり、ブースから出てきた摩美々が隣にいた。

「いや、すごいな摩美々。本当に一人でも問題ない。正直驚いてたんだ」
「…ふふー、本気出せばこんなもんですよ」

摩美々はいつものようにツインテールをいじって笑顔で返した。

たまにだが、摩美々は悪戯っぽい笑顔でなくて、とても優しそうな表情で笑うことがある。

ああ、本当に嬉しいんだろーなと見ていて思うくらい良い笑顔を。

今、そういう顔をしていた。

ラジオ収録じゃなくて雑誌の撮影の仕事を取ってくればよかったかもと、つい考えてしまった。流石に関係者に失礼か。

ひとしきり褒めて、帰り支度をしようと一緒に楽屋に戻ろうとすると、摩美々が何かに気づいたように言った。

「プロデューサー」

「ん、どうした？」

「いえ、ちよつと手を見せてください」

「え？」

摩美々が手を取つてから、気づいた。

昨日、透に塗られたマニキュアが落ち切っていなかった。

まだ薬指の先に薄青いところが残っている。

「ありや、まだ落ちてなかったか」

「…ちゃんと落とさないと駄目じゃないですか。…スタッフさんに見られちゃいますからー」

「それは、あんまり好ましくないな」

身だしなみはキチンとするべきだ。小さい部分でも指先などの先端には人の視線はつい行ってしまふ。

「摩美々が落としてあげますよー、道具も持つてるんでー」

「…そうだな、事務所に戻ったら貸してくれるか」

色を取ろうとしているのか、摩美々は自分の爪でカリカリとひつかいていた。

手を離そうとすると一瞬抵抗があったが、すぐに摩美々は手を離れた。

「…早く、帰りましょうー。戻ったら来週の仕事の打ち合わせもするんですよー?」

「ああ、そうだな。帰ろうか。…摩美々」

「はいー?」

「お疲れ、良い仕事だった。次も楽しみだよ」

「…ふふー、じゃあまた一緒に来なきやダメですねー」

*

事務所に戻ってからは、摩美々から道具を借りて改めてマニキュアを落とす。除光液という物らしい。初めて知った。なくてもよく洗えば落ちるらしいが、使った方が当然落ちが良い。

その後は予定していた打ち合わせを行っていた。時折茶化してきたが、構うとクスクスと笑う顔が絵になるのでつい構いたくなる。まあ、あっちが上手で乗せられることも多いのだが。

しかし、一本仕事を終えたのもあって、少し気が抜けるくらいは許したいがダラダラとやるのも時間がもったいない。

「摩美々、そろそろ進めるぞ」

「えー、もうお終いですか」

「こういう様子は本当に猫のようだ。もつと構えと言わんばかりに自分の髪をモフモフしている。

「打ち合わせが終わったら摩美々は上がりでいいけど、俺はまだやることがあるからなあ」

「二人なのは久しぶりだったんですけどねー」

「…ああ、ごめんな」

「…ふふー、冗談ですよ。そろそろやりますかー」

ソファで寛いでいた摩美々が立ち上がりながら言う。

「真面目にやりますねー。その前に飲み物持ってきてます。プロデューサーはコーヒーでいいですかー？」

摩美々はこちらの答えを聞かずにキッチンへと行ってしまった。

数分で戻ってくると、二つカップを持って戻ってくる。

いつも俺が使っているカップを摩美々は自分の方へ置き、自分用のカップをこちらの方へ置いた。自分の前に置かれたのはコーヒーで、摩美々のはココアだった。

「間違つて逆に淹れちゃいましたー、淹れ直します？」

「いや、もつたいないし飲むよ。摩美々こそいいのか？」

「そこまで潔癖じゃないのでー、使ったら普通に洗えば良いじゃないですかー」

その意見に同意しながら、カップを口元に持つて行く。

しかし、いざ口を付けようとすると一瞬ためらってしまいそうになるが、そうしているとまたからかわれてしまうだろう。

少し冷ましながら、今度こそ口を付けた。

摩美々を見ると、自分と同じように口元に持つて行ったまま、飲んではいなかった。

「…摩美々、飲まないのか」

「…いえ、冷ましているだけですよー」

なんでもないように摩美々も口を付けた。

いつも自分が使っているカップに紫の口紅が付いているのを見ると、妙な気分になった。

打ち合わせが終わると、摩美々が帰り支度をしていた。スマホを見ると15時。予定より早く済んでいる。この分なら、他の仕事にも今日中に手を付けられるかもしれない。

打ち合わせに使った書類やノートパソコンを片付けながら思った。

摩美々を見ると支度が済んだようだった。

「お疲れ、早く終わって良かったな」

「…そうですねー、早く終わりすぎかもですー」

「はは、そういう日もあるさ。じゃあ、俺はまだ残って仕事だから」

「プロデューサー、もう少し…」

摩美々が何か言いかけた時に、外の扉の開く音がした。

そちらに目をやると、少ししてからガチャリと事務所内の扉が開いた。

「お疲れ様です」

「おつ、透。お疲れ、今日はどうしたんだ」

「ちよつと忘れ物して」

「そうだったか、忘れ物しないようになって言っただろ？次から気をつけてな」

「うん、ごめん」

と言いつつ、あまり反省してなさそうだ。こういう所を見ると、まだ仕事を一人で任せるのは早いかと思う。

「…じゃあ、摩美々は帰りますねー」

「あ、ちよつと待ってもらってもいいかな」

帰ろうとする摩美々を透が呼び止めた。

「どうかしたー？」

「うん。私さ、昨日ダメな言い方したから。ごめん」

「…？」

「塗ってあげるって言ってくれたのに断ったから」

その言葉に妙に感動してしまった。まさか透がそんな事を言うとは。

確かに昨日注意したが。

先程の反省してなさそうは撤回しよう。きっと自分がわからないだけで、透はちゃん

と考えるのだと。

「別に気にしてないし」

「うん、良かった。それで折角会ったし、お願いしていいかなって」

「え？」

「マニキュア、塗ってくれるかな」

「…いいよー」

その光景に安心した。何か言うまでもなく、皆は皆で良い関係を築いていくのだらう。

心配していたが、その必要はあまりないかもしれない。

「じゃあ、ちよつと待っていてくれる。喉渴いたから……二人は何か飲む？」

「いや、俺も摩美々もさつき飲んだばかりだから」

「ん、じゃあちよつと待ってて」

透はそう言ってキッチンへ向かった。

その後、自分たちのカップも片付けてしまおうかと思ひ、摩美々の分も持つて椅子から立ち上がる。

「摩美々、透とは上手くやれそうか？」

「まあ、ある意味って感じですかねー」

「そうか、なら良いんだ」

キッチンに入ると、透がインスタントコーヒーをカップに淹れているところだった。こつちに気づくと不思議そうにした。

「やっぱ、いる？」

「いや、片付けに来ただけだよ」

「そつか。…それ、プロデューサーのカップじゃない？」

「え、そうだけど」

「…プロデューサーのカップに紫が付いてるなって」

別に悪いことはしていないはずなのに言われて何故かちよつぴりゾクツとした。

「ああ、間違つて逆に淹れちゃつたみたいで」

「…そうなんだ。…じゃあ洗うから置いてていいよ」

「え、いいのか？」

「いいよ、置いといて」

特に疑問に思うこともなく、シンクに置きキッチンを出す。

妙に圧があつたような気がしたが、理由はよくわからなかつた。

*

透は戻って来てから一息つくとも摩美々にマニキュアを塗られていた。色は透のリクエストで摩美々がいつもしている紫だった。

二人の様子をデスクに座り仕事をしながら、ちよくちよく見ていた。絵になる。

しかし、透の爪が紫になるのを見ると似合っているのだが、正直イメージと違うなと思っただ。

摩美々もそう思ったのか、軽く唸りながら言った。

「うーん、似合わないねー」

「ひど」

「イメージじゃないって感じー」

「うーん、紫。…プロデューサーにも合わなそう」

「摩美々もそう思いますねー」

「え?」

「…似合わないから、似合ったら面白いじゃないんですかー」

「…面白いかな」

「じゃあ試して見ましょー」

それは、こちらがえ?なんだが。同じ事務所の中にいるから内容が全て聞こえる。

二人に目をやると、こちらにそれぞれの色を持ってやってくる。

こういう時は大体断れない。

「プロデューサー、手を貸して下さい」

「…なにか困り事か？」

「ううん、物理的に貸して」

「さてさて、仕事中だ」

「大丈夫ですよー、道具もあるからすぐに落とせますからー」

誤魔化し、効かず。今日は他の件にも手を付けられるかと思ったが、無理だなと内心ため息をついた。

「私が左手」

「昨日、左手塗ってたでしょー？だから今日は摩美々が貰いますね」

結局の所許可はだしてないが、透は少し不満そうに右手を、摩美々は少し嬉しそうに左手を取った。

どういふ状況だろう。アイドル二人が自分の手を取っている。当然近い。握手会より近いのだが。

塗り終わり、両手が彩られる頃にはグツタリとしてしまった。

よくわからない緊張感で息苦しささえ感じたのだ。アイドル二人の圧というのは中々効く。

「出来たね、やっぱりこっちの方が好き」

「ですねー、けどプロデューサーに紫が付いても違和感なくなってきたませんかー」
色々言ってるが、この息苦しさに耐えたことをまず初めに褒めてほしいくらいだ。

「ふう、二人とも満足したろ。今日は終わりな。こっちは手に色は付いたが仕事に手は付いてないんだ」

「…プロデューサー、なんか親父っぽいね」

「あと、あんまり上手くないですよ。付けたのも手じゃなくて爪ですしー」

ほっといてくれ。今は茶化すことでこの場を濁せたらそれで良いなのだ。素直に物を片づけはじめると二人にホツとする。

多分二人も今日はこれくらいと察したのだと思う。

まったく参った。

茶化さないとやばいとか。ホントやばいな。

気づかれなかったがこっちは熱でも出たかと思う程、身体と頭が熱くなった。

あれでまだ高校生なのだから、勘弁してほしい。今より大人になったら正直いつか瓦

解するかもしれない。

この考えが頭をよぎる時点で、自分も相当やばいなと思った。

両手の爪が綺麗に彩られているのを見る。

右も左も薬指だけ濃く塗られているような気がしたが、多分気のせいだろう。

雨に傘、花に水、君に

さつきまでは青空が広がっていたというのに今は空一面が黒くなっていた。降り注ぐ雨の勢いもそれなりに強い。傘がなければ中々辛い。そんな雨だった。

慌ててカバンから折り畳み傘を取り出し、広げた。

広げるまでの短い間に鞆とコートに雨がしみ込んでしまい、うわ、と思わず声を出した。

周りの人たちも傘を持っていた人は急いで傘を差し、持っていない人は走って、おそらく駅に向かって行った。

流石に多少は濡れてしまうが傘を持っていてよかった。鞆の中には帰ってから使う書類が入っているのだ。濡れてしまうと困る。

教えてくれてありがとう、と雨が降るかもしれないと教えてくれた事務所にいるであろうアイドルに心の中でお礼を言った。

「雨みたいないか」

教えてくれたアイドルが言っていた言葉を思い出す。

確かにそれっぽい、と感じることはあるが見事に当たったなあと感じた。今日のテ

レビの天気予報では雨の心配はなかったのだ。

「…なんか買っていないのかな」

お礼、というと素直に受け取らないかもなと思わず口が緩んだ。

どうせだ、皆の分も買って行こう。簡単なものなら大丈夫だろうと、菓子店ではなく帰り道の途中のコンビニに向かった。

コンビニに着くと、見知った顔がいて目が合った。

いつも通り綺麗な服装にグレーの髪。前髪からわずかに傷パッドが見える。

「霧子」

283プロ所属のアイドル。幽谷霧子がコンビニの入り口に立っていた。雨宿りしているのだろうか、立っているのはコンビニの軒下なのに、雨に降られている様子はどうにも様になっていた。

「お疲れ様。…雨宿り?」

「プロデューサーさん、その…傘を忘れてしまっただけ」

雨宿りしている美少女は絵になる。結華のことも、雨宿りしているときにスカウトしたものだ。勝手に思い出した。

困っている様子の霧子だが、特に服が濡れている様子には見えなかった。最初からコ

ンビニにいたのだろうか。

「レッスンに行こうとしていたら、雨みたいな匂いがして」

「そうか、降る前にコンビニに。俺は傘があったから良かったけど災難だったな」
うちのアイドルたちは、どうにも雨に敏感なようだ。よくわかるな。

「ふふ…さつきまでちよつとだけ困ってましたけど、今はプロデューサーさんに会えま
したから。ラツキーかも」

ドキリとする。霧子はたまにこういうことを言う。

平静を装って、いつも通り接した。

「そうか、俺もラツキーだ。ここで会えたから霧子を雨で濡らさずにすんだよ」

差し入れと一緒にビニール傘も買おう。そう霧子に伝える。

「一緒に選んでくれるか、差し入れ」

「はい、けど」

「ん、なんだ？」

霧子はいつもの優しい気な微笑みというよりは、どこか悪戯っぽい笑顔で言った。

「傘は、プロデューサーさんの中に入れてもらえれば大丈夫です」

「え…いや、それは良いんだけど…帰りとかさ」

「事務所に何本かありますから、買うの、もったいないなって」

「…霧子が、良いなら」

「はっ♪」

なんというか、結局押されてしまったような気がしないでもない。アイドルの押しに勝てた試しが最近ないような。

気を取り直してコンビニで霧子と差し入れを選んだ。コンビニスイーツって結構好きだ。最近のはどれも美味しい。

全員分とはいかないが、シュークリームを今回はチョイスした。

雨の中、傘に霧子と二人で入り事務所への帰路に着く。

濡れないようにと、当然身体が触れてしまうくらい近くなるが、出来るだけ何ともないように振舞った。

折り畳み傘というのはそんなに大きくはない。二人で入ろうとすると、近づいていてもやはり少しは濡れてしまう。既に傘からはみ出た右肩に雨がしみ込んできている。霧子はそうならないようにと、出来るだけ悟られないように傘を寄せた。

やはりビニール傘を買った方が良かったと思うが、霧子の表情を見ると嬉しそうに微笑んでいる。まるで雨に濡れることなんて気にならないといった感じだ。だから言い出すことはなかった。

「大丈夫か、霧子。結構肌寒いだろう」

雨の匂いと霧子の匂いがして、少し雨で濡れている彼女を見て、本来肌寒いと思うが身体はちよつと熱かった。

横目で霧子を見ると、頬と耳にかすかに赤みがあつて口元は相変わらず微笑みを作つていた。

「こちらを見上げる様子に、またドキリとする。

「大丈夫です。…その…実はこうして歩くのちよつと楽しいです」

「…そうか、でもこれ以上雨が強くないかなうちにな？」

「はい。雨と一緒に帰しましょう」

なんでもないように振舞うのが、最近どんどん難しくなつてきていると思う。気のせいではないと、そろそろ認めなければならぬのか。

霧子の歩くペースに合わせて歩を進める。

トン、トン、と足を鳴らし、ちよつと楽しそうな足取りの霧子を見ると雨に降られるのさえも悪くないかもしれないと思つた。

*

事務所に着くと、やはりお互い多少は濡れてしまった。とりあえずタオルで軽く拭こうと事務所のドアを開け中に入ると、今度は赤みが強めの髪色に黒いパーカー姿が目に入る。雨の降る外を窓越しに眺めている。レッスンが終わって休んでいたのだろうか。同じく283プロのアイドル、樋口円香がソファに座って窓の外を見ていて、こちらに気づくと軽く頭を下げた。

「お疲れ様です」

「ああ、お疲れ様」

「お疲れ様」

誰かいた事に少し安堵した。差し入れを買っても渡す相手がいらないと意味がない。

それと一緒に今日は珍しい組み合わせだとも思った。霧子と円香、この二人が一緒にいるところをあまり見たことがない。

少し考えていると、濡れているこちらの様子を見て円香が言った。

「雨、降りましたね。…濡れました?」

「ああ、流石にちよつと濡れちゃったな」

「幽谷さんも」

「うん、ちよつとだけ。でもプロデューサーさんのお陰で、あんまり濡れなかったよ」

「プロデューサーの?…まあいいですけど」

濡れてもニコニコした笑みを浮かべる霧子とは対照的に円香はこつちを向いて少しむすつとしたような、怪訝そうな表情をした。嫉妬とかだつたら可愛いものだが残念ながら円香はこれがいつも通りである。

相変わらずの様子に苦笑いしながら、上着を脱ぐ。

脱いだコートを見ると当然濡れている。特に傘からはみ出ていた右肩の部分ががつりだ。やはり相合傘というのはロマンがあるが実際にやると結構濡れる。乾かさなくは

「幽谷さん、髪乾かして来たら。濡れたままレッズンは嫌でしょ」

「うん、ちよつと行ってくるね」

霧子は言われた通りこちらにペコリと頭を下げてから洗面台の方へと向かった。

当然アイドルが優先である。霧子が乾かし終わったら使わせてもらおう。

洗面台の方からドライヤーの音が聞こえてくる。

ひとまず自分のデスクに荷物を置こうとすると、上にタオルが置いてあることに気が付いた。

少し驚いて、ちらりと円香の方を見る。円香はスマホを見ていて、こちらを見ようとはしない。

それから事務所を見まわすがやはり、はづきはいない。というより円香以外はいない。

「…」

思わず頬が緩んだ。実は雨が降るかもしれないと教えてくれたのは円香だ。

コートの水気をタオルで拭きながら、ちよつと伏し目がちに買ってきたシュークリームを見る。

素直に受け取らないかも、か。

いつも通り悪態を吐かれながら受け取ってもらおう。そっちの方が良い。

どうせ円香に嘘などすぐバレる。軽く服や荷物を整えて、ソファに近づく。

「円香、これ今日のお礼だ」

スマホから顔を上げて、円香はこちらを向いた。座っているから自然と上目遣いになり、特徴の一つである泣き黒子が相まって妙に色気が出ていた。

差し出したシュークリームを見て、ため息を一つ吐いた。

「降るかもって言っただけで、お礼とかいいですから」

「そう言われると思ったんだけど、実際助かったからさ」

「その正直に言えばいいだろうって感じもあまり好きじゃありません」

「はは、知ってる」

今まで何度も言われたことがある。けどこのやり取りは嫌いじゃなかった。

円香は受け取りながら言った。

「…コンビニのスィーツって結構カロリーあるんですよ」

「え」

「ほら、350kcalもあるじゃないですか。…私、今週雑誌の撮影あるんでしょ」

「ああ、いやほら毎日レッスンしてるし、自主練だつてさ」

「それ…言わないで」

「す、すまん。はは…」

嫌いじゃないと思いつつも、中々上手くいかないものだ。みんなにはプロデューサーは何でも出来そうなんて言われたこともあるが、実際はこうして空回りの連続だ。

首に手をやりながら申し訳なさの含んだ、乾いた笑いがでる。

「まあ」

「…」

「嫌いじゃないですけど…シユークリーム」

円香の頬が少しだが緩んだ、ように見えたのと同時に、ドライヤーの音が止んだ。ハッとすると、円香はいつもの表情に戻っていた。

*

昨日とは違い良く晴れていて、気分良く外回りを終えられた日だった。抱えていた仕事も順調に進み、今日の天気と同じような晴れやかな気持ちで事務所でデスクに着いていた。

事務所の中には自分以外に、霧子と円香が会話をしていた。また昨日に引き続き珍しい組み合わせの二人だ。

二人の時はどんな会話をするのだろうか、正直想像がつかなかった。

内容は円香がたまになら植物に水くらいやる、等が聞こえてきた。なるほど、確かに円香は好きか嫌いかに関わらず、任せっぱなしにするのはあまり好みではないだろう。

「ふふ…あげちゃいけない人は…いないよ」

微笑みながら霧子が返した。

本当に良い娘だ。こんなに心の綺麗な子いる？

なのにこちらを見る時たまに悪戯っぽくなるのがズルい。摩美々に影響されたのか。霧子から水差しを受け取った円香も普段より表情が柔らかいように見える。

二人で事務所に飾ってある花や葉たちに水をあげている様子は私服なのにも関わらず雑誌の1ページみたいだなと思った。

つい見ていたのが悪かったのか、円香がむすつとした顔でこちらを向いた。

「なに笑って見てるの、頭の中に咲いてる花にも水掛けられたいんですか」

「勘弁してくれ、微笑ましいなって思ってただけなんだ」

「水をやるたびにそんな顔されたんじや気が散るんですが」

「悪かったって、俺もこっちに集中するよ」

その様子を霧子は微笑ましそうに見ていて、クスクスと軽く聞こえた。その様子に頭をワザとらしく掻いて、円香はそっぽを向いた。

悪かったよ、と内心思い、それにしてもやっぱり良い気分だなと感じていた。

植物に水をやるのを円香に任せ、霧子はキッチンへと向かって行った。数分経つと、おそらく三人分お茶とお菓子を持って戻ってきた。

事務所に置いてある茶葉は以前仕事先から貰ったもので中々値が張る良い品だ。お茶に関しては素人だが、良い匂いが漂っているのが分かった。

「円香ちゃん、終わったら休憩にしよ？ プロデューサーさんも」

「…どうも」

「おお、ありがとうな！ たまにはお茶もいいな」

もっぱらコーヒーしか飲まないため、たまに誤解されるのだがお茶だって好きだ。嫌いな人はほとんどいないと思うけど。

「その人には水でいいのに」

「おいしい」

「コーヒー飲みすぎなんですよ」

「あー、それは…心配かけてすまん」

「…別に。でも普段飲んでもものがコーヒーか栄養ドリンクしかないのは、どうなんですか」

それに関しては心配してくれてありがとうと、ごめんの両方が出てしまう。実際飲みすぎなのかもしれないと、たまにだが思うことがないわけではない。

「せっかく心配してもらったんだ、少し控えることにするよ」

「そうですか、期待しています」

「円香ちゃん…優しいね」

その様子にまた霧子が少し微笑み、円香は特に表情を変えなかった。

悪態にも似た気遣いを貰いながら、やっぱり悪くない気分でお茶に口を付けた。

ちよつと苦くて美味しかった。

*

いや、申し訳ありません、という他ない現象が起きている。

昨日コーヒーを少しは控えるといった手前、朝の目覚めの一杯しかコーヒーは飲んでいない。

ちらりと事務所の時計を見ると18時になりそうな頃だ。そろそろ仕事に行ったアイドルたちの何人かは帰ってくる時間だ。

なんというか、飲みたい。口が寂しい。

禁煙でも禁酒でもないというのに、情けないと内心考えていた。

集中しきれずに、何となく背伸びをしながら事務所をポーつと眺めると、昨日水を貰っていた植物たちが目に入る。

水を貰った花や植物たちは、貰う前より茎と葉を真っ直ぐにピンと伸ばしていた。今の自分とは対照的だな、なんて考え、立ち上がって窓際に近づいた。

間近で花や植物の様子を見ると、気張れと言われているような気がしないでもなかった。

流石プロデューサー。我ながらロマンチックだなあと考えながら、気分を入れ替えようと窓を開けた。

「…あれ」

窓を開けると、日が長くなり、まだ明るめの空は晴れてはいるのだが一昨日に嗅いだ

ような匂いがしているのに気が付いた。

雨の匂いだと思った。

雨の中、外に出たのは別に濡れたかったというわけではない。

ただ何となく、ソワソワしてしまったとしか言えない。休憩がてら昨日も入ったコンビニへと足を運んだ。見知った誰かがいるなんて保証はないというのに。

周りを見ると以前と同じだった。傘を持っていた人は差しているが、突然の雨に駅なのか、どこなのか当然知らないが各々の行くべき場所へと走っている人たちがいた。

既に水たまりも出来始めていて、歩きやすいとはまったく言えない。車が走ると車道の水たまりの水が歩道まで跳ねる所も出来ているようだ。

なんで空は晴天だと思ったら突然曇ったり雨が降ったりするのか、色々原理やら理屈があるんだろうが不思議だなと思った。

まあいいか、詳しいことなんて知らなくても。雨だが昨日ほど強い雨ではない。気分転換ということで、と誰に言うでもなく内心呟いた。

「あ……」

「……なんですか」

昨日と霧子と同じく、同じコンビニで雨宿りをしている様子の円香がビニール袋を手

に引つ掛けて立つていた。

なんかいつも雨宿りに使われているな、このコンビニ。

「いや、休憩でコンビニにな。円香は…」

「見てわかりませんか、急に降ってくるから」

「そんなに濡れてないみたいで良かったよ」

先日と全く同じシチュエーションだな。こんな事なら予備の傘を持って出てくるんだった。

「コーヒーと一緒に傘も買ってくるよ」

「要りませんよ、コーヒーも傘も」

「え？」

「傘は貴方の方に入れて下さい。あと、コーヒーは買わないで」

「え、でもさ」

「事務所も近いのにわざわざ買うことないでしょ。相合傘で恥ずかしがる歳ですか？」

おっしやる通りで。でも一応ね、君が見たいな美人や美少女と相合傘なんてやると多分誰でもちよつと緊張するもんだよ、と当然口には出さずに思った。

結局コンビニでは何も買わずに、帰路へと着いた。コーヒーを買えなかったのは残念

だが、円香が濡れずに済んだので、結果オーライだろう。

歩き出そうと思つたら、雨がもつと近寄んなさいと言わんばかりに勢いを増した。勘弁してくれ。

傘と一緒に入っているために、いつもよりずっと近くにゐる円香がこちらを向いた。泣き黒子に涙の代わりに滴つた雨が流れて、妙に色っぽい。

うん、やはり緊張する。

「それと、これは一応お礼です」

円香は持っていたビニール袋からコンビニで買ったであろう缶コーヒーを出した。

「え」

「今日はあまり飲んでないんですよ、だから買わないで良いって言ったんです」

「あ、ありがとう。でもいいのか」

「……」

円香は少し考え込むように下を向いた後に、なんでもないように顔を上げた。

「…私も水くらいやりますよ」

「…はは」

それなら仕方ない。あげちゃいけない人はいないのだから。

そういえばこのコーヒーはお礼だと言われたが、円香は俺が来ると思ったのだろうか。それとも差し入れのつもりで買った？これまたそういえば、霧子も事務所からそれほど離れていないコンビニなのに雨宿りしていたっけ。

まあ、あの時は雨も強めだったし。

「どっちでも良いか」

「なにが」

「いや…なんでもないよ」

ちよつとぶるつと震えた。やはり雨で肌寒いな。

受け取った缶コーヒーが温くなる前に口に含み、身体を温めた。

横目で見る円香は少し微笑んでるような気がした。